

国際貢献(17)

2021-2022

20周年特集

つなげる未来 つながる絆



JMAS

Japan Mine Action Service

認定特定非営利活動法人

日本地雷処理を支援する会

● JMAS設立趣旨

世界の現実には、恵まれた日本国民の常識からは、程遠いものがあります。民族、宗教、領土等の問題は、残念ながら全てが、話し合いで平和的には解決されていないのが現実です。21世紀に入っても、この傾向は、止まる兆しが見えません。軍事的衝突が発生する度に大きな災禍が残されてきました。その中の1つが地雷(対人・対戦車地雷、不発弾及びこれらに類する爆発物)であります。

20世紀後半、世界の各地で発生した地域紛争の跡地には、膨大な数の地雷等が残されたままです。その中で、日々の生活を送る多くの人々が今もいます。親を失い、手足を飛ばされた子供達が厳しい環境の中で生きている。そんな姿を見て立ち上がったNGOは、日本にも、世界にもありました。現在、活動中のNGOも存在しています。

しかしながら、地雷地帯の処理安全化活動そのものを実行するNGOとしては、その行動の危険性と専門性から、一般市民構成のNGOには限界があり、その活動は停滞・休止の状態にあります。現在、効果的に活動している地雷処理関係の外国NGOは、軍歴経験者が中核となったNGOのみとなっています。日本においては自衛官経験者が中核のNGOが期待されながら、関係者はこの種の活動を控えてきました。それなりの理由がありました。

しかし、今や、国際協力に関する日本国民の意識は、著しく変化し、自衛官経験者が中心となったNGOが設立されても、国の内外から誤解を招くこともなく、その真意が正しく理解される時期が到来したものと判断するに至りました。日本人の誠意と真心を国際協力の現場で、お金や物のみでなく現地で働く人間の姿として表現したいものと決意した次第であります。

2002年2月19日

特定非営利活動法人 日本地雷処理を支援する会

● 事業実施の原則

- 1 活動地域に治安の安全がある。
- 2 活動地域、国家が自助努力の意思を持っている。
- 3 JMAS、日本に対して正しい理解が得られる。
- 4 JMASの能力対応事業がある。



20年前JMASは彼らの笑顔を取り戻すため活動を開始しました



●目次

I JMAS 20周年を迎えて

II 祝辞 20周年に寄せて

III JMAS 20年の歩み

- 1 JMAS誕生
- 2 年表と写真でたどる20年
- 3 随想
- 4 励ましの声

IV JMASの今 2021—2022 年次報告

- 1 2021～2022 概観
 - (1)世界の地雷・不発弾問題の現状
 - (2)JMAS 2020～2021活動概観
- 2 カンボジア王国
- 3 ラオス人民民主共和国
- 4 パラオ共和国
- 5 ミクロネシア連邦
- 6 本部
 - (1)全般
 - (2)広報

V 将来ビジョン「JMAS 2030」

VI 資料

- 1 JMAS早わかり Q&A
- 2 活動に関する統計
- 3 不発弾・地雷カタログ
- 4 デマイナー(処理隊員)の素顔
- 5 現地B級グルメ
- 6 会勢概況(2022.3.1)

VII ご支援のお願い



I JMAS 20周年を迎えて

認定特定非営利活動法人

日本地雷処理を支援する会(JMAS)会長 岡部 俊哉



事業は大体3期か4期に区分することができ、第1期は創業・垂統、第二期は継承・守成、第3期は因循・姑息で、最後は頹廢・没落となる。第1期の創業の力の旺盛な人は先ず根本的に言って非常な創造

力、言い換えれば骨力・気力、最も平たく言えば『元気』というものがある。第2期の継承・守成の時代は、先代の活力・気魄・抱負・経綸といったものを受け継ぎながら、それを整えて、そうしてよく守って堅実に維持してゆく。第3期になると、とかく安心して、或いは既成勢力に甘んじて、先代のような気魄・気概、或いは二代目の様な気節・節義・節操、用意・注意・反省というものがだんだんなくなって、因習にとらわれてその日暮らしになる。

【安岡正篤著「活学 事業と人物」】

現在、JMASはカンボジア、ラオス、パラオ及びミクロネシアの4カ国において引き続



不発弾の爆破準備(カンボジア)



不発弾の探査(ラオス)



爆雷の移送準備(パラオ)



油回収用ホースを展開する専門家(ミクロネシア)

き着実に成果を上げるとともに、各現地政府等から高い信頼を得ております。これも皆様方の御支援・御協力の賜物であり、心から御礼申し上げます。

創立20周年を迎えた
JMASの事業は、現在紛れもなく継承・守成の真っ直中にあります。その中で職員・関係者等の真摯な取り組みにも関わらず、被害に苦しむ

汚染地域の存在認識と地雷等(ERW)処理に関する認知・支援が国際的に低下傾向であり、これに連動するが如く、JMAS会員数の減少も顕著となってきております。一方で国際貢献に関する要望・要求は一向に減少することなく、地雷不発弾問題の世界的な解決の目標年である2025年に向けたERW処理への取り組みのみならず、環境保全全般更には処理地域の有効活用、各種能力構築支援、各種機関・NGO・企業等との協同・協力の必要性等、その在り方は多種多様化してきております。このため微力ではありますが、日本国を背負って現地で汗をかきながら、国際社会のニーズに柔軟かつ的確に応えらるとともに、インド太平洋地域の平和や安定にも寄与するJMASには、停滞ましてや因循・姑息、頹廃・没落に堕ちることは、将来に渡り絶対に許されないのであります。

このため現在、岸川理事長を核心として、JMASを取り巻く各種環境の変化等を踏まえ、さらに「魅力と活力にあふれる組織」を目指し、将来ビジョン「**JMAS2030**」の策定に取り組んでおります。将来ビジョンにおいては、「安全で豊かな国際社会の創造に貢献する。」ことをミッションとして掲げ、「『街づくり』『人づくり』を通じた『安全で豊かな社会の創造』、「SDGsを始めとした地球規模の課題への取り組み」及び「国内外の関係機関等との連携の強化」を重視した事業を展開して参ります。このため、これらに必要な財政・人的基盤の強化やJMAS自体の意識の改革や組織・業務改善等にも積極的に取り組んで参ります。



妹に勉強を教えるカンボジアの少女



20周年という大きな節目を迎え、将来に向け発展していかねばならないJMASは、今一度創業・垂統の時代に思いを馳せ、諸先輩方・先代が示された創造力、気魄・気概そして元気を発揮して、日本人としての誇りを胸に自らの優れた技術をもって、国際貢献に前向きに挑戦し続けて参ります。

今後も引き続き御理解、御支援・御協力を宜しくお願い申し上げます。

Ⅱ 祝辞 20周年に寄せて

「JMAS20周年に寄せて」

第2代会長 先崎 一



自衛隊による本格的な国際貢献活動が始まって約10年が経った頃、陸上自衛官OBの有志によるNPO法人「JMAS」が設立されました。

その報に接した時、「自衛官時代の経験を活かせ、内戦等で取り残された危険な地雷を除去するという人道支援であり、やりがいのある活動だな」という印象を強く持った事を思い出します。その後まもなく、私も自衛隊を退き、新たな一步を踏み出し始めていた頃、縁あってJMASからお誘いを受けました。幸い会社の理解も得られ、又個人的には、現役時代の最後の仕事となったイラク人道復興支援活動という、国際協力活動にも関わってきた経験等から心を動かされ、ボランティアの一人として約5年間JMASの会長を務めさせていただきました。

あれから早10年、JMASが今年設立20周年を迎えられたとのことで、まことに感慨深いものがあります。

会長就任当時はJMAS設立後5年を経過しており、カンボジア・アフガニスタン・ラオス3ヶ国での不発弾・地雷処理等の活動が、ほぼ順調に行われておりました。

しかしながらアフガニスタンでは途中、治安悪化に伴い拠点を隣国パキスタンに移して活動を続けましたが、当初からの計画を変更せざるを得なくなりました。と同時に支援拠点となったパキスタンで一時的とはいえ、現地ニーズにもとづく丘陵地帯での新たな水道改善事業を実施することになりました。その他の地域においては、これからさらに拡大していこうとする時期だったように思います。



パキスタン・シハンナ村の人々による
給水タンク完成の祝い

幸い、コマツを始めとする民間企業等の協力・支援態勢も強化され、活動内容も扩大到は拡がって参りました。カンボジアでは地域復興支援活動も始まり、さらに防衛省関連の「能力構築支援」という、カンボジアPKO要員の能力向上のための支援事業に、現役陸上自衛官と一緒に取り組むようになりました。又、ラオスにおいては外務省関連の官民連携事業(生薬栽培予定地の地雷処理等)にも着手しています。

2008年からは、アフリカ大陸アンゴラでの機械投入による地雷処理活動、南方パラオにおいては、戦時中の沈船から漏れ出ている有毒物質の処理作業に海上自衛官OBも加わり、陸・海統合のOBチームによる新規事業の開始等、活動地域も扩大到は拡がってきています。

しかしながら、2008年、認定NPO法人に指定されたとはいえ、その後の活動資金、後継者たる人材確保等の活動基盤の脆弱性は以前とさほど変わらず、これらをいかに克服していくかは、常に取り組むべき課題となっていました。

云うまでもなくJMASの活動は、外務省(現地大使館)を始め、民間企業等の協力諸団体、個人会員、海外での有志の方々等の物心両面にわたる御支援・御協力によって成り立っています。

しかし、そこでの活動の主体は、専門的な知識・技能等の経験をつみ重ねてきた志の高い自衛官OBであり、このことは今後も変わることはないと思います。

新型コロナ禍が世界的にまん延し続けている今日、遠く家族と離れ様々な制約の下、不自由な生活の中で今も頑張っておられる仲間の皆さんに、心よりの経緯を表します。

発足後20年。自衛官のOBのよき伝統となっているJMASの活動が、これからも引き継がれていくことを祈念しています。



ラオス・サラワン事業の開始式で基準杭の設置式



ラオスの夕日

JMAS20周年に寄せて

第2代理事長 野中光男



1 現地に初めて立った時の思い出

私が地雷処理に携わることは想像の外でした。当時のJMAS活動地域はカンボジア、ラオス、パキスタン及びアンゴラでした。それぞれの国の現地を見ては驚くことの連続で、なにに驚くかといえますとJMASが不発弾及び地雷等の処理をしている地域はベトナム戦争等時代の戦場であったところだったからです。その戦場であったところに佇み、ここで兵士たちが戦ってきたことを考えても戦争経験のない私にはその様を想像すらできませんでした。彼我の兵士たちが戦い、傷つき倒れ、そして戦死した地であったことを思いますと私が歩いている場所も兵士たちが戦死傷した場所かもしれないのです。そう思うと気楽には歩けませんでした。なぜならば戦場で倒れた兵士たちの魂を踏みつけているような気がするからです。

戦争が終わった現在でも戦争当時の痕跡は至る所にあり、そこに破裂しなかった爆弾やその破片、戦車や兵士を倒す地雷等が埋まっているのです。現地の人たち、たまに子供たちがそれを掘り出し、真鍮や銅などを売って生活の足しにしていることもあります。その際に事故が発生し、重傷を負い、ひどい場合には死亡する事故も後を絶たないのです。



不発弾で負傷した
カンボジアの少女

2 現地職員との会話

JMASの現地職員と時々話す機会があります。そこで出てくる話の一つに「理事長の給料はいくらか」というのがあり、私が「無給だ」といいますと目を皿のように大きくして「嘘だ」と言うのです。もちろん東京及び現地で直接JMAS事業のために直接働いている職員は有給ですが、そのほかのJMASの会長以下理事たちは全員無給なのだといくら説明をしても「ただで働いている」ことを信じてもらえなかったことを思い出します。

3 日本企業による協力・支援

日本の企業にも大変な支援をいただきました。それらの企業からは利益を無視してJMASや被支援国復興等のため資機材等を提供いただいています。また、戦場地域の制圧等のためのクラスター爆弾(野球のボールぐらいの大きさの爆弾。親爆弾の中に数百発が入っている対人用等爆弾)をより効果的に処理ができる機材の開発もしていただきました。

外務省が支援母体ですが、その資金だけではJMASの目的すなわち地域の安全化を達成できませんので多くの個人及び企業の支援を受けて成り立つ組織でもあります。私の勤めていた総合商社からも毎年寄付をいただきました。



JMASとコマツとの間で
支援協定書を締結



親爆弾から放出され
たクラスター子弾

4 企業戦士たちの活躍

私たちは日常において比較的幸せな生活を保っています。活動地域を視察していく過程において現地で日本産業の発展に大きく貢献している企業等の活動を自分の目で確認できたことは幸いでした。どの国においても日本の企業の社員たちが活動しています。現地で直接見ないと理解できないと思いますが、必ずしも健康的でない地域において日本の資源を獲得するためにきわめて多くの日本企業の社員が働いています。彼らの努力や業績なしでは日本の産業等の発展は成しえないし、それがなければ現在の日本人の幸せな生活を維持できないことであり、それを現地で確認できたのはありがたいことでした。



視点・論点「オヤジたちの
国際貢献」にて、JMASの
活動を紹介(NHK教育TV)

5 結言にかえて

いろいろと私が感じたことを書いてきましたが、これからも皆さんの協力をいただければ幸いです。

日本地雷処理を支援する会設立20周年記念によせて

参議院議員 佐藤正久



日本地雷処理を支援する会(JMAS)の設立20周年、まことに
おめでとうございます。

カンボジア、ラオスに始まり、アフガニスタンやアンゴラ、ミクロ
ネシア連邦等、戦火にさらされた各国の戦後復興に地道に貢献
を続けられてきた貴会の献身的な活動に心から敬意を表します。地雷・不発弾処理と
いう命の危険を伴う作業に身を挺して活動され、また、処理作業のみならず、処理要
員の育成や生活環境の改善、そして社会教育の推進等、被支援国の自立と将来を見
据えた活動の数々をされてきたことは、感服に堪えません。ともすれば何か象徴的な
施設等を建設して終わりといった旧来の一過性の強い支援ではなく、被支援国の方々
が自分達の将来を自ら切り拓ける様に寄り添いなが
ら活動されている姿は、昨今取り沙汰されている「持
続可能性」という言葉にも一脈通ずるものがある様に
思えます。

そして「持続可能性」と言えば、自然環境の維持・改
善に関する活動も関連性が高いですが、貴会がミクロ
ネシアで実施されている第2次大戦時の沈没船からの
油回収活動もまた時代の流れに即した活動と言えるで
しょう。さらに言えば、沈没船はその船で亡くなられた乗
組員の方々の「海の墓標」、その清掃と慰霊を担われて
いるとも言え、私自身も直にチューク諸島でJMASの活
動に触れ、身の引き締まる思いでした。

将来を担う子供達により良き未来の可能性を残すのは、我々大人達に課せられた最
重要の義務です。そして、その義務を果たすには、まずは戦争による負の遺産の危険
性を取り除いて安全を確保しなければなりません。それを日本の大人達が、他国の人



ミクロネシアにおける戦没船から油回収をするJMAS専門家

達のためにやっている。同じ日本の大人として、また陸上自衛隊出身者として、これほど心を揺さぶられることはありません。論語には「義を見て為さざるは勇無きなり」（困っている人を見てこれを助けないというのは、なんとも勇気の無いことだ）という一節があります。人間が持つ義侠心に関する言葉ですが、その義侠心を体現している貴会の活動は「義を見て為す、これまさに勇有り」と言って良いと思います。

思い起こせば1991年の湾岸戦争では、「ペルシャ湾岸の石油を大量に輸入しておきながら、日本はお金を出すだけで、血も汗も流さない」と国際社会から非難され、国民は非常に悔しい思いをしました。戦争終結後に海上自衛隊の掃海部隊が派遣されましたが、前述の日本への非難を完全に払拭するまでには至らず、やはり適時適切な実際の行動が国際貢献のうえでいかに重要かということの思い知らされた一件でした。

日本は憲法第9条により武力紛争への軍事介入はできませんが、湾岸戦争での教訓から各種法律が整備され、医療援助等の後方支援や紛争終結後の復興支援は可能です。そうした中で地雷・不発弾処理の任に当たられる貴会は「戦後復興の先鋒」としての役割が今後も大いに期待されると考えております。そして、先にも述べました様に、復興事業を進めるうえで安全の確保は何より重要です。その任に身を挺して当たる大人達の姿は、日本の子供や若者たちにとっても、心を揺さぶられ、社会人として将来あるべき姿の指針の一つになり得るものと思います。爆発物処理の高度な知識と技術が必要とされる任務ですから希望する誰もができる国際貢献とは言えませんが、いかなる形であれ、「世の中の困っている人達を助けよう」という精神の発露のきっかけになるでしょう。

貴会が2002年の設立以来連綿として続けてきた活動は、日本が国際社会に誇れる貢献の在り方の代表的事例です。また、厳しさを増す現在の国際社会の安全保障環境において、貴会の活動の重要性が薄れることはないでしょう。まずは会員の方々ご自身の安全を確保しつつ、「戦後復興の先鋒」として1人でも多くの方々を助けられることを祈念して、設立20周年のご挨拶とさせていただきます。

祝 辞

参議院議員 宇都隆史



皆さんこんにちは、自衛隊出身、参議院議員の宇都隆史です。世界にはまだまだ多くの戦争の爪痕である地雷が撤去されずに残っています。それにより手足を失う子どもたちや、開発されずに放置される貧困地帯を救うため、現在も数多くの国際NGOが活躍しています。このような地雷地帯の処理安全化活動は、その行動の危険性と専門性から、一般市民によるNGOには、自ずと限界があり、地雷処理は軍歴経験者が中心となるのが通常です。そのような中、2002年に「日本地雷処理を支援する会(以下:JMAS)」が立ち上がり、今年で20周年の節目を迎えました。JMASは、自衛隊出身者を中心として設立された国際NGOです。心ある複数の自衛隊出身者が退職金を出し合って組織をスタートさせたとも伺っています。この20年間JMASは、地雷・不発弾処理に関する我が国唯一のNGOとして、地雷・不発弾問題の世界的な解決の目標年である2025年に向け地雷・不発弾除去に取り組み着実な成果を挙げるとともに、地域復興、環境保全等の支援を進めてこられました。この20年間の軌跡に、心から敬意を表すると共に、改めてお祝い申し上げます。

JMASは現在、カンボジアはじめ4ヶ国にて活動を行っているとお承知しています。新型コロナウイルスの世界的規模の感染拡大は、JMASの活動にも大きな影響を及ぼし、感染防止策としての国際航空便の運航停止、厳しい入国規制、国内の移動制限措置等により活動は大きく制限されていると聞いております。中にはロックダウンする現地でもそこにとどまり意欲的に活動を続け、着実に活動成果を上げている現地の隊員もおられると聞き、その任務にひた向きの姿勢はさすが元自衛官であり、最大の敬意を払いたいと思います。ロシアのウクライナ侵略を含め、世界の安全保障環境はより一層不透明性不確実性を増し、国際的な世界平和維持のための取り組みや連携は、これまで以上に重要な意義を持ちます。地雷が除去された土地が、穀物畑や学校建設地と生まれ変わり、現地のお年寄りや子どもたちの笑顔に繋がっているJMASの活動は、まさに日本の侍たちによる何にも変え難い平和活動だと断言できるでしょう。20周年の節目を機に、JMASの益々のご発展と、隊員の皆さまのご安全ご健勝をお祈り申し上げ祝辞といたします。



祝 辞

コマツ 代表取締役社長(兼)CEO
小川啓之

認定特定NPO法人 日本地雷処理を支援する会(以下、JMAS)様、20周年おめでとうございます。

また、昨今の厳しい環境下で、日々社会貢献に尽力されている会員の皆様方の熱意に心から敬意を表します。

JMASとコマツの歴史を振り返りますと、いろいろなご縁があることに深い感慨を覚えます。まず2001年9月にJMASを設立された初代理事長の土井義尚様は、自衛官退官後、コマツの特機顧問に就任されていました。2004年には、コマツが開発した対人地雷除去機のアフガニスタンでの現地テストを実施した際に、出張社員の安全管理業務をJMASにお願いしました。

そして2008年からは、JMASを支援する形で、カンボジアでの地雷除去と跡地の復興プロジェクトを共同で開始し、アンゴラ、ラオスへと活動の場を広げてきました。今日まで、コマツの歴代の会長、社長、役員、そして社員多数がカンボジアなどの現場を訪問していますが、危険な地雷原で黙々と任務を遂行されるJMASの使命感と、現地の復興の流通の源となる道路建設等のJMASの技術力の高さに、訪問した全員が深く感銘を受けております。そして、その現場でコマツの機材がお役にたっていることが、大変誇らしく思っております。

この活動はコマツのCSR活動の大きな柱として、今日まで継続して実施しております。最近では田圃の収量を上げる農業促進も新たに取り組み、そしてカンボジアでの復興プロジェクトの15年目の節目にあたる2022年度には、10校目の小学校が開校する予定と聞いております。残念ながら私は、社長就任初年度から新型コロナウイルスが流行し、未だ現地訪問は出来ていませんが、コロナが収束した際には、真っ先に訪問したい海外の現場の一つです。

今後も、数少ない日本の地雷処理のNGOとして、益々JMASが世界の平和と復興に貢献されることを願っております。そして微力ながら、コマツとしてもその活動を継続して支援して参りたいと考えております。



祝 辞



UXO Lao 長官 ブンパミット ソムヴィチット

ບົດຄຳເຫັນ

ຜູ້ອຳນວຍການ ໂຄງການເກັບກູ້ລະເບີດແຫ່ງຊາດ

ໂຄງການເກັບກູ້ລະເບີດແຫ່ງຊາດ ແລະ ອົງການເກັບກູ້ລະເບີດເຈມັດສ໌ ໄດ້ເລີ່ມຕົ້ນການຮ່ວມມືກັນນັບແຕ່ປີ 2006 ເປັນຕົ້ນມາຈົນເຖິງປະຈຸບັນ ລວມທັງໝົດ 5 ໂຄງການ ມີມູນຄ່າທັງໝົດ **11.432.285 ໂດລາສະຫະລັດ**, ຊຶ່ງອົງການ ເຈມັດສ໌ ໄດ້ໃຫ້ການຊ່ວຍເຫຼືອ ທາງດ້ານງົບປະມານ, ເຕັກນິກວິຊາການ ແລະ ວັດຖຸ-ອຸປະກອນຕ່າງໆ ໃຫ້ແກ່ ຄກລ ຕະຫຼອດໄລຍະ 16 ປີ. ອົງການເຈມັດສ໌ ເປັນອົງການຈັດຕັ້ງສາກົນໜຶ່ງທີ່ມີບົດບາດສຳຄັນໃນການປະກອບສ່ວນຊ່ວຍເຫຼືອ ສປປ ລາວ ໃນຂະແໜງການແກ້ໄຂບັນຫາລະເບີດບໍ່ທັນແຕກ. ຜ່ານການຈັດຕັ້ງປະຕິບັດໂຄງການຮ່ວມມືນັບແຕ່ເລີ່ມຕົ້ນຈົນເຖິງປະຈຸບັນ, ໂຄງການໄດ້ປະກອບສ່ວນອັນສຳຄັນເຂົ້າໃນວຽກງານການແກ້ໄຂບັນຫາລະເບີດບໍ່ທັນແຕກທີ່ຕົກຄ້າງຢູ່ ສປປ ລາວ ໂດຍສາມາດປົດປ່ອຍເນື້ອທີ່ດິນໄດ້ທັງໝົດ 3,341 ເຮັກຕາ, ທຳລາຍລະເບີດໄດ້ທັງໝົດ 48,736 ໜ່ວຍ, ມີຜູ້ໄດ້ຮັບຜົນປະໂຫຍດທັງໝົດ 48,555 ຄົນ ເຊິ່ງໄດ້ຊ່ວຍໃຫ້ປະຊາຊົນລາວບັນດາເຜົ່າມີຊີວິດທີ່ປອດໄພ, ມີພື້ນທີ່ທຳການຜະລິດຫຼາຍຂຶ້ນ, ໄດ້ຮັບຜົນຜະລິດສູງຂຶ້ນ ແລະ ເຮັດໃຫ້ຊີວິດການເປັນຢູ່ດີຂຶ້ນເທື່ອລະກ້າວ.

ພ້ອມດຽວກັນນັ້ນ, ອົງການເຈມັດສ໌ ຍັງໄດ້ຊ່ວຍພັດທະນາສ້າງຄວາມອາດສາມາດ ໃຫ້ແກ່ພະນັກງານ ຄກລ ມີຄວາມເຂັ້ມແຂງໃນການປະຕິບັດວຽກງານພາກສະໜາມ ໂດຍສະເພາະໄດ້ຖ່າຍທອດຄວາມຮູ້ເຕັກນິກວິຊາການໃນການຕັດໂບມໂດຍນຳໃຊ້ເລື້ອຍໄພຟ້າ ໃຫ້ແກ່ ບັນດານັກວິຊາການທຳລາຍລະເບີດຂັ້ນສູງ ແລະ ຫົວໜ້າທີມເກັບກູ້ ຈຳນວນທັງໝົດ 235 ທ່ານ. ບໍ່ພຽງແຕ່ເທົ່ານັ້ນ, ອົງການເຈມັດສ໌ ຍັງໄດ້ຖ່າຍທອດເຕັກນິກວິຊາການໃນການຄວບຄຸມ ແລະ ບັນຊາກົນຈັກທຳລາຍລະເບີດລູກຫວ່ານ ໃຫ້ແກ່ ພະນັກງານ ຄກລ ທັງໝົດ 40 ທ່ານ ເຊິ່ງກົນຈັກດັ່ງກ່າວເປັນນະວັດຕະກຳໃໝ່ຂອງໂລກ ທີ່ນຳໃຊ້ເຂົ້າໃນການທຳລາຍລະເບີດລູກຫວ່ານ ເຊິ່ງ ສປປ ລາວ ກໍເປັນໜຶ່ງໃນບັນດາປະເທດທີ່ໄດ້ຮັບຜົນກະທົບຈາກລະເບີດລູກຫວ່ານຫລາຍທີ່ສຸດໃນໂລກ. ນອກຈາກນັ້ນ, ອົງການເຈມັດສ໌ ຍັງໄດ້ໃຫ້ການຊ່ວຍເຫຼືອສຳລັບການກໍ່ສ້າງອາຄານສູນຝຶກອົບຮົມ ຫຼັງໃໝ່ ລວມມີ ອາຄານຫ້ອງຮຽນ, ອາຄານຫໍພັກ, ອາຄານຫ້ອງການ ແລະ ບັນດາສິ່ງອຳນວຍຄວາມສະດວກອື່ນໆ ພາຍໃນສູນຝຶກອົບຮົມອີກດ້ວຍ.

ເນື່ອງໃນໂອກາດ ສະເຫຼີມສະຫວອງ ຄົບຮອບ 20 ປີ ຂອງ ອົງການເຈມັດສ໌, ຕາງໜ້າໃຫ້ແກ່ໂຄງການ ເກັບກູ້ລະເບີດແຫ່ງຊາດ ຂ້າພະເຈົ້າຂໍສະແດງຄວາມຮູ້ບຸນຄຸນຢ່າງລົ້ນເຫຼືອມາຍັງ ອົງການເຈມັດສ໌ ກໍ່ຄື ລັດຖະບານຍີ່ປຸ່ນ ແລະ ປະຊາຊົນຍີ່ປຸ່ນ ທີ່ໄດ້ໃຫ້ການຊ່ວຍເຫຼືອແກ່ໂຄງການເກັບກູ້ລະເບີດແຫ່ງຊາດ ຕະຫຼອດມາ ແລະ ຫວັງຢ່າງຍິ່ງວ່າ ຈະໄດ້ຮັບການສະໜັບສະໜູນ ແລະ ສືບຕໍ່ຮ່ວມມືກັນຕື່ມໃນອຸມປີ ຕໍ່ໜ້າ ເພື່ອຊ່ວຍເຫຼືອປະຊາຊົນລາວບັນດາເຜົ່າໃຫ້ສາມາດດຳລົງຊີວິດດ້ວຍຄວາມປອດໄພ, ປະກອບສ່ວນເຂົ້າໃນການພັດທະນາເສດຖະກິດ-ສັງຄົມ ແນໃສ່ວຽກງານຫຼຸດຜ່ອນຄວາມທຸກຍາກ ຂອງລັດຖະບານ ແລະ ເພື່ອຊ່ວຍໃຫ້ ສປປ ລາວ ສາມາດບັນລຸເປົ້າໝາຍການພັດທະນາແບບຍືນຍົງ ໂດຍສະເພາະເປົ້າໝາຍການພັດທະນາທີ 18 “ຊີວິດທີ່ປອດໄພ ຈາກລະເບີດທີ່ບໍ່ທັນແຕກ”

ບຸນພະມິດ ໂສມວິຈິດ

2006年から現在に至るまで、JMAS とUXOLaoは協働して5つの事業を行ってきました。これまでにJMASからUXOLaoに\$11,432,285 USDの資金、技術、機材の支援をいただきました。JMASはラオスの不発弾問題解決の部門で重要な役割を果たす国際組織であります。JMASとUXOLaoは、48,736個の不発弾を処理し不発弾で汚染された3,341ヘクタールの土地を安全化しました。裨益者数は48,555人になります。より安全な生活を営み、安全な土地でより高い生産性をあげることができるようになる等ラオス国民の生活状況は着実に良くなりつつあります。

また、JMASにはUXOLaoスタッフの不発弾処理能力向上の面でも支援をしていただきました。特に、チェーンソーを使用して爆弾を切断する「のこぎりカット法」については、SEOD及びチームリーダー合計235人に技術移転をしていただきました。さらに、JMASには教室、寮、事務所、その他の施設を含む不発弾処理教育を行うトレーニングセンターの建て替えをしていただきました。

ラオスは世界でクラスター子弹の影響を最も酷く受けている国の1つであります。現在、JMASから、機械を用いてクラスター子弹を破碎する機械処理に関する技術移転をしていただいているところです。クラスター子弹の機械処理は世界的なイノベーションです。

JMAS設立20周年に際し、UXOLaoの代表としてこれまでのご支援に対し、JMAS、日本政府、そして日本国民の皆様から心から感謝を申し上げます。ラオスの国民が安全に暮らし、社会経済発展の貢献、貧困の撲滅等のSDGsの目標、特に第18番目の開発目標である「不発弾のない安全な生活」を達成するために、これからも引き続きご支援をいただきますようよろしくお願いいたします。

ブンパミツ ソムヴィチツ



20周年を祝して

パラオ共和国 国務省大臣 グスタフ・アイタロー



Ministry of State

7 March 2022
MS-118-2022

Kimihiko Kishikawa
President
Japan Mine Action Service (JMAS)
Republic of Palau

RE: Congratulatory Message- JMAS 20th Anniversary

Dear Sir,

On behalf of the Government and people of the Republic of Palau, I take this opportunity to offer our sincerest congratulations to the Japan Mine Action Service (JMAS) on the occasion of the 20th Anniversary of outstanding commitment and service to improving the environment and lives of not just the people of Palau, but people all over the world.

The incredible work that the Japan Mine Action Service (JMAS) carries out is a constant reminder of the importance of the protection of the lives of the people threatened by the remnants of war. Again, congratulations on 20 years of profound service, and please accept my sincerest thanks for all that you have done and continue to do to support the humanitarian work in Palau.

The Republic of Palau is excited to have you on our island and rest assured the people and Government of the Republic of Palau looks forward to the continued success of your important service.

Sincerely,

Gustav N. Aitaro
Minister
Ministry of State
Republic of Palau

CC: Masato Shimada, JMAS Palau Representative

MINISTRY OF STATE
National Capital, Republic of Palau 96929
Tel: (680) 767-2490/2509 - Fax: (680) 767-2442 - Email: mtshshy.mos.7.jp@gmail.com

3月7日

日本地雷処理を支援する会
(JMAS)

岸川公彦理事長 閣下

20周年を祝して

20周年の祝賀にあたり、パラオ政府、パラオ国民を代表し、心よりお祝い申し上げます。パラオのみならず世界中の命と環境を守る素晴らしい活動が、20年周年を迎えられたことを喜ばしく思います。

日本地雷処理を支援する会 (JMAS) の比類なき活動は、過去の戦争から生まれる命の危険を守るという使命そのものであり、このかけがえのない活動が20周年を迎えられたことをお祝いさせていただくとともに、これまでも、そしてこれからも、パラオにおける大切な支援に心から感謝申し上げます。

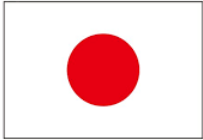
これからもパラオにJMASがあることを喜ばしく思うと同時に、パラオ政府、パラオ国民を代表し、今後も大切な使命を安全に続けられることをお祈りいたします。

パラオ共和国

国務省大臣

グスタフ・アイタロー





ミクロネシア連邦 Federated States of MICRONESIA JMASにむけて



<連邦政府>

- ・環境・気候変動・危機管理省長官／Andrew Yatilman:
JMASの活動は、ミクロネシアの環境保護の為に大変有効である。歓迎するとともに出来る限りの支援を行いたい。
- ・外務省次官補／Brendy Carl:
JMASのミクロネシアに対する貢献は、大変ありがたい。
- ・外務省アジア担当補佐官／Sohses Calvin:
ミクロネシアにおけるJMASの活動については、大統領も理解しており感謝している。我国と日本の友好関係強化の一助となる事業である。
- ・資源開発省海洋資源担当補佐官／Vanessa Fread:
JMASが我国の為に活動してくれていることを感謝する。何かあれば、解決のためのお手伝いをしたい。
- ・公文書、文化・歴史保存室長／Augustin Kohler:
ミクロネシアの水中文化遺産を世界遺産としてUNESCOに登録しようとしているが、JMASの活動はその助けとなる。
- ・連邦議員／Robson Romorow:
チューク州トラック環礁におけるJMASの活動を大変評価している。ポルワット環礁の飛行場整備に協力してもらえないだろうか。

<州政府>

- ・州知事／Alexander R. Narruhn:
説明を聞きJMASの活動について理解した。この様な事業を実施されていることを感謝する。州政府としても便宜を図りたい。
- ・前知事／Johnson Elimo:
四年間の活動ありがとう。今後も継続されることを期待する。

チューク州



- ・官房長／Myjolyne M. Kim:
JMASの貢献に感謝する。便宜を図りたい。
- ・商工長官／Peter Aten:
長年のJMASの活動を評価する。今後とも継続して頂きたい。そのための支援は何でも行うので、何かあれば申し出て貰いたい。
- ・環境保護局長／Bradford Mori:
JMASの活動は大変有意義なものであり、共に仕事ができることを誇りに思う。出来るだけ便宜を図りたい。
- ・海洋資源局次長／Binasto Ruben:
継続的に要員を派出し、共に活動を続けていきたい。
- ・歴史保存室長／Ranger Walter:
技術移転の実施について大変感謝している。
- ・州判事／Kerio Wallaby:
JMASの活動は我々チュークにとって大変ありがたいものである。日本の友人が来たことはとても嬉しい。
- ・Covid-19 Task Force／Douglas Marar:
JMASは、チュークにとって大変重要な事業を実施している。待機している専門家が早期に入国できるよう努力する。

<その他>

- ・マイクロネシア教区監督／Midion Neth:
私の父親は日本人に大変世話になった。日本が再びマイクロネシアを支援することは喜ばしい。日本人と知り合いになれて光栄です。
- ・ザビエル高校長／Martin K. Carl:
JMASの活動を本校生徒に広く知らせたい。
- ・豪副大使／VY Duong:
JMASがマイクロネシアのチューク州で素晴らしい貢献をしているとお聞きしている。豪政府もお手伝いをしたい。



Ⅲ JMAS 20年の歩み



1 JMAS誕生



初代理事長 土井義尚

生れる前から生まれていたJMAS

JMASの誕生は、任意団体として2002年(平成14年)2月に発足し、東京都から法人認定を受けたのはその年の5月でした。しかしながら、そんな誕生手続きの2年前に既にカンボジアで生まれていました。

それは当時CMAC(カンボジア地雷処理センター)の副長官とCMACで勤務中のJICA専門家(元陸上自衛官)との間の会話の中では2000年頃からJMASという名称で生まれていたのです。命名主は副長官(後に長官)でした。しかし、その組織を実際に日本に誕生させる道筋は決まっていなかった。

そこでJICA専門家が2000年の夏に先ずは私のところに話を持ってきました。私は即座に明確にお断りしました。一年後の2001年の夏にも再び東京に来て説得しようとしたのですが私の考えは一年前と同じでした。ただ、折角の機会でもあるし、時間もあるのでカンボジアを見に行くこととしました。というのは、カンボジアが陸上自衛隊としての最初の国際貢献活動の地であったからで、その成果がどのように残っているのかに興味があったからです。



現地視察

12月になったら寒い日本でゴルフをやるよりカンボジアまで行ってやってみるのも一興だとも考えたのです。したがって訪問間に陸上自衛隊施設大隊の国際貢献活動の跡地であるタケオ市訪問とゴルフができることを条件にしてお遊び気分で行ったのです。

しかし、カンボジアではCMAC長官以下特に副長官が準備万端で待ち構えていました。後々判ったことでしたが、何としてもJMASを設立して欲しいとの魂胆でした。

名称は将来活動目標、

そんな中に引き込まれるとは思ってもみずに行ったのです。



CMAC長官と覚書調印

しかし、対人地雷処理NGO設立については引き受ける考えにはなりません。現地での活動状況等から対人地雷処理支援の必要性は理解できましたが、億円単位の活動資金が必要であり「地雷処理活動支援はやれない・やらない」に変わりは有りませんでした。

ところが「不発弾処理支援はやれる・やろう」になってしまいました。その後4回に亘る現地調査を実施して2002年7月1日に最初の不発弾一発が処理されたのでした。

不発弾処理支援専門のNPO法人として出発しましたが、名称に「地雷処理を支援する会」としたのは、地雷処理支援を目指す法人の意思を明確にしたからでした。



地雷の機械処理現場確認

NGO界に誕生したのは読売国際協力賞受賞から

JMASが生まれる前に日本国内には地雷処理に関係するNGOは既に3個法人ありJMASが一番新参者でした。しかし乍ら活動実績一年で第10回読売国際協力賞を受賞してしまいました。この賞はこの年だけは実績評価ではなく将来の活動期待度評価であったのでした。この受賞による広報効果は絶大で一挙にトップクラスのNGOになりました。より厚い信頼が寄せられ、より大きく期待され、より熱い応援を受けて、それらに応える力をつけることが出来ました。



読売国際協力賞受賞式の西元会長

そこからは、自ら決めた活動4原則の最大限迄活動範囲を広めてアフガニスタンでの軍閥武装解除国際監視団業務の請負、パキスタンでの地雷処理支援と並行しての給水支援活動更にはアフリカでの地雷処理活動支援の実施まで拡大してしまいました。

ラオスでの不発弾処理活動支援、パラオやニューギニアでの海中危険物処理活動は活動の延長線上にある活動で将来は更に不発弾処理や地雷処理分野以外にも進出して活躍されることが期待されているものと思います。



カンボディアの子供達

JMAS20周年を迎えてこんなことを思い返しています。

令和4年4月 JMAS設立発起人の一人

土井 義尚



事務局の皆さんと

2 年表と写真でたどる20年

2001年		2002年		2003年	
9月	●任意団体JMAS 設立	1月	●カンボジア地雷処 理センター (CMAC)と活動準 備相互協力覚書	3月	●カンボジア不発 弾処理事業開始
12月	●第1回カンボジア 現地調査	5月	●東京都からNPO 法人認定	6月	●外務省横井政策 課長現地視察
		9月	●カンボジア政府フ ンセン首相・西本 会長会談、JMAS 国際NGOへ	10月	●第10回読売国際 協力賞受賞
				12月	●アフガニスタン DDR調査



悲劇を繰り返さないために



地雷除去開始



JMAS設立前調査



外務省横井政策課長現地視察



活動開始の日



読売国際協力賞受賞

2004年		2005年		2006年	
2月	●アフガニスタンDDR、IOG調査	7月	●アフガニスタンにおけるDDR終了	4月	●対ラオス国MOU調印
3月	●パラオ諸島ペリリュー島遺骨収集団不発弾担当者参加	9月	●ラオス事務所設立	5月	●日本財団より「ラオス・シェンクワン県における不発弾処理事業」への助成受け
4月	●国連IOG受託契約			8月	●アフガニスタン政府より国際NGO承認受け
5月	●アフガニスタン現地事務所開設				
6月	●CMACとの共同作業に関する契約				



パラオ焼骨式の準備



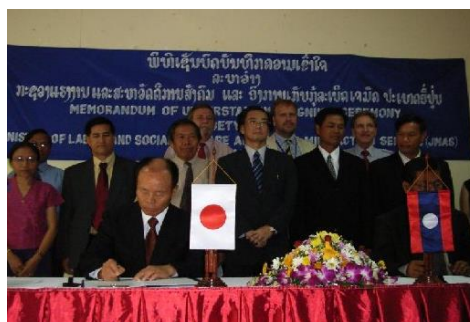
DDR現場の田川監視団員



通学のアフガニスタン女学生
つかの間の平穩



放置されたパラオの不発弾



JMAS対ラオス国家のMOU調印



NGO無償資金協力贈与
契約。桂在ラオス特命全
権大使・田川ラオス代表



アフガニスタンの有り余る兵器



一面トップで伝える現地英字紙



ラオスの子供たち

2007		2008年		2009年	
1月	●19日、カンボジア CBD事業で隊員7名の死亡事故発生	1月	●カンボジア「コミュニティ開発事業」に関するコマツとの契約締結	3月	●パキスタン水道改善事業開始
2月	●アフガニスタンにおける地雷処理開始	6月	●国税庁長官から認定NPO法人の認定受け	4月	●アンゴラ共和国ベンゴ州における地雷除去開始
10月	●「平和構築分野の人材育成のためのパイロット事業」に関する広島大学との業務委託契約締結		●アンゴラ地雷処理・地域復興支援事業締結		



カンボジア地雷事故隊員への慰霊



コミュニティ総合開発事業(CIDPJ)に関するコマツとの契約締結



学校も出来た



アフガニスタンで地雷除去開始挨拶をする西元JMAS会長



CIDPJで学校敷地について調整



生活も変わった



アフガニスタン地雷除去の現場



道が出来る



アンゴラ共和国



アンゴラ事業開始セレモニー

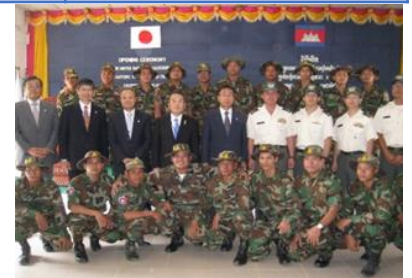
2010		2011年		2012年	
2月	●ラオス不発弾処理跡地にラオ・ツムラ設立	3月	●東日本大震災救援活動	8月	●カンボジア国王より人道支援貢献により感謝状受賞
6月	●国税庁長官から認定NPO法人の認定受け ●2010年度パキスタン水道改善事業開始 ●2010年度アンゴラ地雷処理・地域復興支援事業開始	12月	●JICA事業(アンゴラ専門家派遣)開始	12月	●パラオ海中不発弾処理事業開始 ●防衛省事業(カンボジア能力構築支援)開始
7月	●カンボジア・バタンバン州地雷処理(MCV)事業開始				



ラオ・ツムラ生薬加工場



地雷処理と住宅地造成(アンゴラ)



防衛省からの受託事業能力構築支援開始



3時間の水汲みが村で出来るように(パキスタン)



カンボジア国王より感謝状受賞
勲位:モハ・セレイ・ワット



パラオ事業始まる



在カンボジア王国日本国臨時代理大使と契約・署名式



シンガポールのNGO Mercy Reliefと協働して、東日本大震災被災地に救援物資を提供

2013年		2014年		2015年		2016年	
3月	●アフガニスタン地雷処理事業終了	11月	●UXOLaoとの不発弾処理事業・技術移転	4月	●東京都から認定NPO法人の認定受け	4月	●バットアン州にて地域インフラ整備
8月	●アンゴラ現地テレビ局取材受け	12月	●カンボジア処理要員の育成事業 ●パラオ爆雷亀裂補修作業開始		●UXOLao長官ティパソツン氏来訪 ●CMAC長官ラタナ氏INAD人事情報技術部長ジト氏来訪	8月	●ラオス・シェクワン県クラスター子弾処理機械化事業



アフガニスタン処理跡地の引き渡し式



テレビ局取材受け(アンゴラ)



ラオスUXOLao-ATP隊員とJMASスタッフ・折木会長



第一回「ピース・アワード HIROSHIMA」受賞



不発弾探査・除去(ラオス)



日本NGO連携無償資金協力署名式(引原大使と荒川理事長)



アフガニスタン処理跡地に広がる葡萄畑



笑顔で薬草を栽培するラオスの女性



汚染潜水服を着用する専門家

2017年		2018年		2019年		2020年	
9月	●ラオス・シェンクワン県等におけるクラスター子弾機械処理促進事業	2月	●カンボジア「CMACに対する不発弾処理に係る能力構築支援事業」終了 ●パラオ不発弾処理事業	4月	●カンボジア農業整備支援事業		●新型コロナウイルス感染症パンデミック ●カンボジア「安全な村づくり事業」

※対人地雷除去機(不発弾処理用):「クラスター子弾除去機(通称)」と呼称



旧校舎(カンボジア)



ラオスで活躍するコマツのクラスター子弾除去機(通称)※



パラオ爆雷揚収要領訓練



完成した新校舎(カンボジア)



ラオスでの爆破処理



ミクロネシア戦没船からの油回収



作業を心待ちにするカンボジアの女性



カンボジア均平化による米の増産

3 随想

創立10年目で、カンボジア地雷処理支援からの撤退危機を克服

元カンボジア現地統括代表 渡邊 榮樹



2011年12月上旬、JMASプノンペン事務所で執務中、携帯電話に日本の宮内庁から、9月にプノンペンから送付した平成24年歌会始め詠進歌の入選内定の連絡がありました。

入選歌は、お題が「岸」で
「子らは浴み、岸辺に牛が草を食

む、こぞの我が地雷処理跡」です。(こぞとは去年のことです。) 2011年雨季初めの5月、バタンバン州の「安全な村づくり(SVC)」視察に訪れた時に、JMASが設計した小川にかかる水没橋の下で、子供たちが白い牛をつ

れて、水遊びをしていたのが強く印象に残り、それを素直に詠みました。翌年1月、歌会始の儀に参列するため一時帰国した折、JMAS本部に挨拶に行きますと、野中理事長(当時)が「歌会始めに入選したことは、国内に広くJMASの活動を知って

もらうための、すばらしい広報になった」と喜ばれました。1月12日宮中にて天皇、皇后両陛下から、入選者一人一人に直接お言葉を頂きましたが、皇后さまは、対人地雷に大変ご関心が強いと窺われ、頑張ってくださいとの激励を受けました。

その2か月前、2011年11月下旬、プノンペンにおいて「対人地雷禁止条約第11回締約国会議」が開催されました。JMASは、各国代表団の現地視察地SVCでの道路整備、地雷の機械除去展示等、全面的に協力しました。更にプノンペン会議会場に隣接する地雷処理活動等に関連する組織等の展示コーナーに、日本のNGOの中で唯一ブースを開設いたしました。会議開始に先立って、フンセン首相が、各ブースを視察されましたが、JMASのブースには、同行されました黒木在カンボジア日本大使とともに中に入って、代表の説明を聞きながら熱心に展示されているパネルを見られました。あとから黒木大使が、「首相が最も長く居たのは、JMASのブースであった。」と喜ばれました。



詠歌のイメージ



フンセン首相視察

実は、ブース内のパネルには、日本のロータリークラブからの寄付により製作した「学校の平和の鐘」をコンポンチャム州へ寄贈したとき、受け取っていただいた州知事の写真を大きく展示しておりました。知事はフンセン首相の兄で、州は首相の郷里でした。

さらに遡って2011年4月にJMASカンボジアが、外務省に対する会計検査院検査の関連で、現地検査を受けました。海外の日本NGOとしては、初めての受検でした。カンボジア事務所は、結果的に「特に問題がありません。」との所見を受けました。JMAS東京本部から受検の打診がありました時、検査指名を受けるなら、積極的にカンボジアでの活動特に地雷処理支援活動を理解してもらおうとの方針で臨んだ結果でした。

2010年3月、カンボジア赴任にあたって、東京本部から、外務省からカンボジアの地雷処理支援は、もう十分でないかとの意見が出ており、状況によっては最後の代表になるかもしれませんと言われて送り出されたのです。その覚悟でプノンペンに到着してみれば、そういった雰囲気は全く見られず、本部と現地の感覚のズレを痛感しました。しかし日本大使館を表敬訪問すると、担当職員から地雷処理支援継続に関しては、否定的な所見を直接聞きました。これではいけないと、まず事務所スタッフから意見を聞くと、全員が、まだまだ地雷処理を支援したいとの意見でした。代表として当然現地の意見を尊重すると決心して、あらゆる機会を通してJMASの活動を国内外に理解してもらい、最終的に外務省に地雷処理支援継続の意義を認めてもらおうと、東京本部、現地スタッフの協力により、一体となって機械処理を軸とした新理論を構成するとともに、代表なりの努力を続けました。結果的に3年間の継続が認められました。しかしながら、当時その後10年続くとは予想しておりませんでした。今思い返しても現地代表として中身の濃い2年間でしたが、頑張ったことが、報われたと感慨深いものがあります。



CMACとの協定書署名式
CMACヘン・ラタナ長官とJMAS渡邊榮樹現地統括代表

JMASラオス代表としての思い出



元ラオス現地代表 黒川純一

JMASがカンボジアで活動を開始して以来、20年が経過しました。発足当時の諸先輩の高邁な志が途切れることなく続いてきていることに、とても嬉しく思っております。

ラオス(ラオス人民民主共和国)での事業も、2006年に開始以来、ラオスの支持を得て、現場で活動されている専門家をはじめ、関係する職員の並々ならぬ熱意に支えられて継続しています。嬉しく、意義深く感じています。

ラオスでは、全国で毎朝、托鉢が行われ、また、貧しい子供は寺院で育てられるなど、仏教がラオスの人々の生活に根付いています。豊かな自然と共生し、のんびり、穏やかに見える暮らし振りですが、2021年末に、中国雲南省の国境からラオス首都ビエンチャンまでの鉄道が開通しました。人の流れや物の移動が急激に増えているようですが、これからのラオスの行く末を見守っていきたいと思います。

私は、2010年6月、ラオス、ビエンチャンに着任しましたが、我々日本人の価値観が通用するのか、自問する日々でした。そんな中、年1回、活動に関する会議を催すように義務付けられていましたので、相手先を見つけ、参集範囲、議題、進行などの調整を進めました。その際、違和感が示されるかどうか、細心の注意を払いました。幸い、考え方を共有でき、活動への理解を深めてもらえました。また、活動の中でラオス側に事業内容の一部委託や建設の委託などをしようとする際、JMASは、「ラオスについて何もわかっていない(現地の環境、商習慣、文化、考え方、価値観など)」ということを活動の根底に据えました。そして、限られた期限までに、日本側の目にかなう成果を得るとともに、ラオス側にも充分満足のいくように事業を進めました。一つの手順の例として、

①情報収集

利害の関わらないラオスの関連組織から、契約相手先となれるようないくつかの組織についての情報提供を依頼



多くの住民も参加して不発弾処理事業開始式



信管除去をする専門家

②契約予定の相手先訪問

契約予定相手先を訪ね、これまでの実績、設備など活動環境、リーダーの人柄などを確認

③見積りを求め検討

見積もりを出してもらい、JMAS内で検討(金額のみならず、事業の成果にかかわる項目を重視して比較)

④契約相手選定、契約

⑤継続的な確認

定期的に現場確認(忙しい中、専門家にも依頼)

計画と進捗を確認、問題が予測されれば、早期に情報共有(大使館、政府機関など)し対処

⑥完成セレモニー

完成は、JMASのPRになるばかりでなく、日本・ラオスにも関係するので参加者を多く募り、着実に実施。

※ 言葉の違いから、意思の疎通が深くできない中でも、良い人間係を作り、それを継続するように努める。

2010年、ラオスで不発弾に関する世界会議があり、JMASもPRのためブースを出して参加者に見ていただきました。その際、中東から来た人が、第2次大戦当時のUXO処理が進んでいないと言っていました。改めて、世界には、資金難や治安の問題などから、いまだ安全でない地域が多くあると実感しました。JMASは今後も着実な歩みを続け、生活環境改善に貢献していただきたいと思えます。



日本からの寄贈品を
現地の村に贈呈



不発弾に関する
世界会議に参加



日本財団による、台風により破壊された
不発弾除去教場再建事業



不発弾の処理地は薬草畑へ

パラオにおける水中不発弾処理

元パラオ現地代表 谷川保行



パラオ共和国は、第1次世界大戦後から太平洋戦争終了まで日本の委任統治領。日本の統治行政がパラオの社会基盤発展や人々の生活向上を促し、また、パラオ独立後に日本から多くの援助が提供されているため、非常に親日的な国で日本的なものが多く残っています。そのパラオ勤務は、カンボジア、東京(事務局長)に次ぐ3番目の任地で、2015年3月から翌年3月までの1年間でした。チームパラオのメン

バーは、3人の海自OB(処理、衛生救護)、1名の日本人女性(総務通訳)、3名の現地スタッフ①から成り、業務に欠かせない船舶は、在パラオ日本大使館勤務の日本人女性のご主人であるパラオ人男性が保有し操船も行っており、幸運にも日本語が通じました。



パラオにおける水中不発弾の多くは旧日本海軍が使用していた対潜爆雷と銃砲弾で、特に対潜爆雷の劣化による化学物質の漏洩は海洋環境の破壊をもたらし、海洋観光を最大の国家資源と考えるパラオにとって、深刻な脅威となるものです。私は、パラオにおける水中不発弾の処理事業を、日本が行うべき戦後処理支援及びパラオの環境保護政策支援と位置付けていました。

パラオで当初得られた水中不発弾の情報は、ヘルメットレックと呼ばれている旧日本海軍の徴用船に残っている対潜爆雷②のみでした。パラオ政府も、「処理は全てJMASに任せるのでよろしく」という態度で、政府としての準備もほぼ皆無の状態でした。このため、JMASとしてはまず、米国の資料を参照しつつ海域ごとの情報収集計画を作り、週間・月間単位の業務実施要領を検討して政府との調整に入るとともに、水中不発弾の計画的調査を開始しました。



パラオ政府との事業実施の調整は当初、大臣及び局長を相手に行いました。彼等は、安全上の配慮から水中不発弾の爆破処理は行わず、不発弾への近接を禁止することで不発弾の脅威を封じ込めることができると考えていましたが、政府部内での検討を受けて爆破処理へと方針を転換し、政府として必要な対応措置の策定に乗り出しました。実務者(局長以下)グループの設立、ドクトリンやマニュアルの策定、処理場や処理資器材の調達等です。しかし、議論は行うものの誰も結論を出そうとせず、在任間、パラオ政府に強く求めていた水中不発弾処理場の設置と爆破資器材の調達も匂いを味わう程度で終わりました。

JMASは、水中不発弾の調査を進める一方で、2015年12月6日、ヘルメットレックに残されていた対潜爆雷2発の爆破処理を実施しました。2週間以上の準備を重ね、1発250kgの爆雷を筏に乗せて海上輸送③を行い、途中の港湾でトラック輸送に切り替え、最後は人力で処理場爆破地点へ設置④したのち、豪州

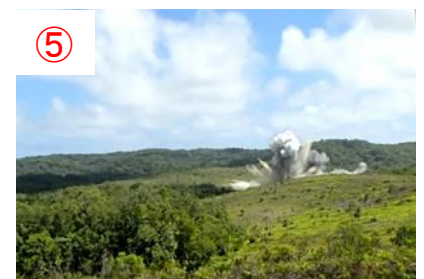


NGOのCGDによる爆破支援を得て、爆破処理に成功⑤しました。が、ハプニングも。

対潜爆雷を処理場爆破地点に設置する際は爆雷がネットからこぼれ落ちそうになり、肝を冷やしました。また、CGDからは爆破に要した費用の請求があり、CGDはこの件で米大使館(米国務省からの補助金あり)から注意されたようです。



パラオ滞在間最大のイベントは、2015年4月8日～9日に行われた天皇陛下御夫妻(現上皇陛下御夫妻)のパラオ訪問でした。特にペリリュー島において両陛下が捧げた鎮魂の誠は心を打つものでした。JMAS日本人スタッフ5名は8日夜、他の日本人グループとともに両陛下との懇談という栄誉に浴しました。両陛下はJMASの活動についてご存じのようで、10分間にわたり熱心に質問されました。JMASスタッフは、過度の緊張、喉からからの状態であったためか記憶喪失状態になっていました。



最後になりますが、3名の海自OBスタッフ及び総務通訳の望月さん、いずれもチャレンジ精神旺盛で専門知識・能力を存分に発揮して、素晴らしい成果を上げて頂きました。お礼を申し上げます。



ミクロネシア事業の思い出

元チューク事務所代表 井上 潔

2017年5月に赴任し、コロナ禍もあり帰国できたのは2021年10月末であった。今回「オヤジ」に投稿する機会を得たので4年半に及ぶミクロネシア事業を振り返ってみたい。

ミクロネシア事業は他のJMASプロジェクトと全く異なる「戦没船からの油流出対策」である。2016年に現地偵察を実施し現地の状況、要望事項等を確認しできる限り準備をして臨んだつもりであったが現実には甘くなかった。先ず最初に実施しなければならないことはMOUの締結であった。事前に案を在日FSM大使館に見てもらい2週間もあれば締結できると見込んでいたが大いなる誤算であった。連邦政府はNPO組織とMOUを締結した経験がないそうでMOUの担当者を決めるまで非常に時間を要した。担当者からは次々と英文の資料提出を要求されその都度、本部と調整しながら対応した。この頃は未だ事務所、アパートにインターネットが引かれておらずホテルやアパートで知り合ったJICAのシニアボランティアの女性の部屋の前のベンチで作業する日々であった。担当者の病気や出張による不在(離島へ行った場合は1週間は帰ってこない)、更には署名者を外務大臣にするか資源開発大臣にするかで揉め最終的にサインが完了したのは約2か月後の7/13であった。この間4回もポンペイ⇄チュークを往復することとなった。

次の課題はエントリーパーミットの取得であった。MOUが締結されたので7/18にイミグレーションへパーミットを申請した。MOUの締結に時間がかかったので代表・専門家の滞在期間が30日を超えてしまったので多額の罰金?を払って資格変更手続きをしなければならなかった。エントリーパーミットはポンペイのイミグレーションが審査・発行するのであるがこれにも時間がかかりパーミットが到着したのは10/26と3か月後であった。この間船便コンテナの受領や業務委託業者である深田サルベージ及びアーク・ジオ・サポートの要員受入れ等も色々苦労したが紙面の都合上、割愛する。プロジェクト作業自体はMOUが締結されたので特に支障なく実施できたのは幸いであった。

最後の課題はグアム銀行の口座開設であった。昨今の国際情勢を受け銀行口座の開設審査は非常に厳しい。チューク到着時に必要な提出書類を確認し準備を実施したが最終的にエントリーパーミットが手に入ったのは前述のとおり10/23でありグアム銀行本店の審査をクリアし口座が開設され大使館からの送金が受領できたのは何と11/19であった。この間、手持ちの自己資金(現金)が不足し日本からの来訪者にドルをハンドキャリーしてもらったことも何回かあった。これまで述べたようにミクロネシアでは何をすることも時間がかかる。政府、民間とも個人的には陽気で気のいい人達だがのんびりしていて時間感覚がまるでない。彼らの「南の島流」の生き方、貧しくても幸せそうな笑顔を見ると日本人としては羨ましい気もした。色々苦労はあったが帰国する際「ありがとう・また帰っておいで」と皆から言われたことで全て報われた思いであった。



アフガン地雷処理事業NGO登録の思い出

元アフガニスタン等現地代表 筧 隆保



ある日突然、理事はJMAS本部へ集合せよとの連絡があった。何事かと思いながら、本部に行くと、カルザイ大統領の訪日に随行していた国防副大臣等大統領随員たちが数名本部事務所に来ていた。なぜ随員達がJMASに来ていたのか私は知らない。私は枯れ木も山の賑わいとばかり、その場でウロウロしていたら、当時の土井理事長が「アフガン事業は筧が担当しますのでよろしく。」等と勝手に話している。私は当時ラオス事業を担当していたので、まさかと思いながら聞き流していた。



それから、何ヶ月かたって土井理事長から「アフガンで地雷処理事業をすることになった。現地調査に行ってくれ。」と言われた。まさに寝耳に水とはこのことで、なんの知識もない私が？と思わず絶句。納得できないまま熊倉先輩と現地調査に行くことになった。



まず、アフガニスタンに着くとNGO登録のため、以前JMAS事務所に来ていた国防副大臣のもとへ挨拶。「これからアフガニスタンで地雷処理事業します。」とNGO登録への協力をお願いし、その足でNGO担当の経済副大臣のところへ行ってNGO登録申請書を出した。JMASはアフガンで武装解除等の実績があり、NGO登録は簡単だと思っていたが、なかなか許可がおりない。聞いてみると、武装解除事業終了後数年JMASの年度報告が途絶えているので許可できないとのこと。JMASは年次報告もしない不良NGOと見られていたらしい。NGO登録がほしいならJMASの名前を変えて新たな名前で申請してほしいと言う。私はJMASの名前を変えてまでお願いする事業でもないと思い帰国することにした。そして国防副大臣のところへ帰国の挨拶に行った。



事情を話すと、国防副大臣がすぐ電話を取って経済副大臣に「日本の支援は紐付きではないのでありがたい。なぜNGO登録ができないのか」と強い口調で言ってくれた。その後、経済副大臣のところに行くと、いろいろ言い訳をしながらも許可をくれた。あの時、国防副大臣がJMASを知っていなければ、また理事長がアフガン事業の話をしていなければ、NGO登録は難しかったかもしれない。



なお当時のアフガニスタンはタリバン政権が崩壊した後で治安もよく、口座開設のため銀行に行くと若い女性がたくさん働いており、また街中には女学生が通学する姿も見えた。政変後彼女たちは今どうしているだろうと思うと胸が痛む。

アンゴラ共和国における地雷処理事業に従事して



元アンゴラ現地代表 大田保重

1 はじめに

2008年8月～2016年5月に亘り、約200ha(東京ドーム約43個分)の地雷を除去し、終了したベンゴ州マブバス地区における本事業に、私は当初は担当理事として、再就先での勤務を終えた2010年からJMAS本部において、事業の担当として勤務。そして2013年4月初め、当時の理事長から「急な話ではあるが6月からアンゴラ現地代表を」と依頼され、同年6月から、2015年4月迄現地代表として勤務。足掛け7年間弱、係りました。以降、現地勤務における所感等を述べさせていただきます。



2 強盗事案

6月16日出発直前の14日早朝(日本時間)に日本人スタッフの居住ベースに銃を携行した5人組の強盗が押し入り、金品を奪うとともに日本人スタッフ(仏外人部隊OB)が頭を殴られ、頭部出血の重傷を負ったとの報を受けました。行くことをためらうこともできず、「これから大変だぞ」と思うとともに重傷を負ったスタッフの安否を心配しました。家族にこのことを話しましたが、その時は家族から『心配』との声も聞かれなかったものの帰国してから「あの時は心配した」と聞かされ、いつも勝手気ままに行動する夫に「仕方がない」と諦めていたものと思われれます。



灌木の中を進む対人地雷除去機

現地到着後は、日本大使館への細部状況の報告をはじめ、この事案への対策樹立が

現地代表としての最初の仕事となりました。現地に居る陸自OBスタッフの助言を受け、外柵の整備、夜間照明灯の設置及び警備員の再教育の施策を講じました。それが功を奏したのか、現在に至るまで同種事案は発生していません。



近傍部落での教育

3 生活

生活における悩みの種は、食事の準備でした。1日交代の輪番制による自炊です。自衛官時代に10年近くに亘る単身赴任があり、時々炊事はしていたものの、人様に食べて貰う食事の支度は不慣れであり、帰国時に、トランク一杯に手軽に食せる食材を持ち帰っても、限度あり、また現地で入手可能食材が限定されていることから、担任の時は、海自同様毎週金曜日の作り慣れた「カレーの日」を除き毎回頭痛の種でした。しかしながら、夕食時、これまでの経歴も違うスタッフと現地のビールを呑みながら、四方山話に花を咲かせたこと等現地でしか味わえない体験も得ることが出来ました。



処理地が住宅に

4. 終わりに

事業資金の認可を受けた政府関係者(民間援助連携室)、激励を頂いた大使をはじめとする現地在留邦人の皆様、寄付金及び資機材の提供を受けた企業(コマツ、住友商事並び豊田通商等)、適切な指導・助言を得たJMAS本部及び現地日本人スタッフのお蔭をもちまして、なんとか約7年間に亘るJMAS勤務を、終えること出来ましたことに感謝の気持ちで一杯です。



JAMAS-INAD活動記念碑除幕式



Revista Africaおよびテレビ東京の取材受け

地雷処理中の爆発死亡事故の思い出

元JMAS事務局長 松尾 和幸



2005(H17)年6月～2012(H24)年7月の7年間、副理事長兼事務局長を務めました。その時の思い出は沢山ありますが、1つのみ、お話しします。

2007年正月、外務省民間援助連携室への新年挨拶時、土井義尚理事長が「事故は起きるかもしれない。例え事故が起こっても、事業は止めないでいただきたい」とお願いしました。その舌の根も乾かない1月19日、カンボジアの地雷爆発死亡事故が起きた

のです。その頃はスマホもなく、カンボジアとの電話も満足に繋がっていませんでした。

園部宏明カンボジア代表からパソコンメールにて一報が入りました。会社で勤務中でしたが、カンボジア担当理事だった私は、JMAS事務所へ急行、カンボジアとの連絡・情報収集に当たりました。

事故の概要は、2006年6月開始した住民参加型地雷処理事業の地雷探査中に爆発が起こり、小隊長以下7名(男性4名、女性3名)が

即死しました。いつもの金属探知機の音と違うと、

ディマイナーが気付き、二人ペアですので、もう一人のディマイナーに代わって探査しましたが、やはり違うとなり、上司の班長へ、班長は更に小隊長へ報告し、次々と駆けつけてきて7名が1.5mの幅に集まった時に爆破しました。全員即死でした。一番飛ばされたディマイナーは120mも飛ばされていました。その時の爆破穴です。



爆破穴

事故後直ちに、園部代表は、亡くなられたディマナーの各家庭に御見舞金を持参してお詫びに回りました。娘さんを亡くされた父親が、「娘の意思を私が継ぐ」と地雷処理に参加されました。このように事故が起こっても、現地はJMASを恨むことなく頼りにしてくれました。事業の継続が心配されましたが、カンボジアからも外務省からもお咎めもなく、

継続することができました。

事故調査の結果、ソ連製の対戦車地雷9個が同時に爆破したと見積もられています。その後、この現場の近くに慰霊碑を建立しました。慰霊碑の中に殉職者7名の遺影を掲示しています。後ろの山が147高地です。この高地がタサエン村の概ね中心地であり、丘の上にバゴダ(寺院)を建立するのがこの村の願いでした。この丘の地雷を除去するのは大変な苦勞でした。斜面に草木が生い茂り、緊要地形のために激しい戦闘が行われ、膨大な不発弾・地雷と金属片が存在したからです。頂上のバゴダへ上る階段です。

高地の頂上にはバゴダが建立されています。147高地から見た写真です。(地雷原が青々としたチャサバ畑に変わりました)このような事故を二度起こさないで事業が継続されることを祈念しております。



147高地から見た地雷処理後のチャサバ畑



慰霊碑



遺影



バゴダへの階段

4 励ましの声

高知商業高等学校 2年5ホーム 国際コース 近澤 雛帆

今回、JMAS様に講演をしていただき、多くのことを学ぶことができました。それは、過去の戦争で埋められた地雷が現在も残り、多くの住民がその地雷や不発弾により苦しんでいるということです。そして、重要なことはこれらの問題は決して他人事ではないということです。私は講演を聞くまで、地雷は自分には全く関係のないことだと考えていました。豊かな日本で、毎日を安全に楽しく暮らす、それが当たり前の日常になっています。しかし、今回の講演で、地雷によって被害を受ける人々が世界に多くいることを知りました。

地雷と聞くと、自分たちには関係のない、無縁なものだと考えてしまいます。もし自分が地雷の多い地域に生まれ生活をしていたら、もし自分自身が地雷の被害を受けてしまったら、と考えると現地の人々が毎日をどのような思いで暮らしているのか、考えるきっかけとなりました。また、講演を聞くなかで、地雷の恐ろしさが伝わってきました。ひとつの地雷を踏むことで自分のこれからの人生が、そして家族の生活が変わってしまいます。そんな危険と隣り合わせの生活をしている人々がいるという事実には、目を背けてはいけなかったと考えました。

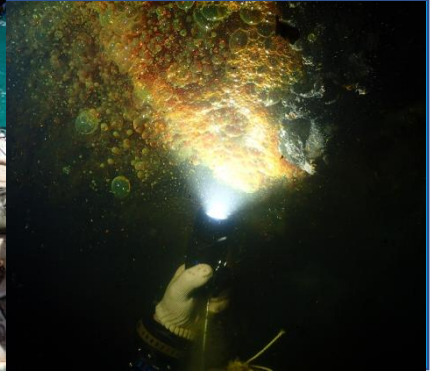
地雷除去に関する国内外の関心の低さを知り、私は講演で聞いたことを1人でも多くの周りの人に伝えていきます。そして今自分ができることを考え、なんらかの形で活動をしていきます。



この現状を1人1人が知ることで、それはやがて大きな力になります。今、直接的な支援ができなくても、寄付など、間接的な活動を仲間と一緒にしていこうと考えています。今回の講演は高校を卒業し、成人しても、なんらかな形で、どこかで活動を続けていくきっかけになりました。

IV JMASの今2021-2022年次報告

- ▶ 2021～2022概観
- ▶ カンボジア王国
- ▶ ラオス人民民主共和国
- ▶ パラオ共和国
- ▶ ミクロネシア連邦
- ▶ 本部



JMASの 2021年4月～2022年3月の活動国



1 JMAS 2021-2022 活動概観

(1) 全般

2021-2022のJMASは、前年に引き続き新型コロナウイルス感染症が猛威を振るう世界において、カンボジア、ラオス、パラオ、ミクロネシアの4ヶ国で、地雷や不発弾、海中のERW等の処理、農業支援を始めとする各種の地域復興支援等を実施して参りました。私たちのこの活動は、偏に地雷・不発弾問題を重要課題とする外務省、個人及び法人会員並びに寄付者の皆様、世界初のクラスター子弾処理機等の無償貸与、学校、道路の建設等様々な地域復興支援に取り組むコマツを始めとする特別協力企業・団体の皆様のご支援に支えられています。



朝の検温、カンボジアでもコロナ対策

(1)世界の地雷不発弾(ERW)問題の現状

Landmine Monitor Report 2021

オタワ条約加盟国	164の加盟国、33の未加盟国（2021年12月現在）
世界の目標	～2025年処理目標国 28、以後の目標国 4
地雷汚染国	60 の国と地域（33の加盟国、22の非加盟、5つの地域）
地雷／※ERWの被害者	2020年死傷7,073人 死者 2,492人、負傷者 4,561人 民間人80%、子供1,872人
死傷者＞100人	アフガニスタン、ブルキナファソ、コロンビア、イラク、マリ、ナイジェリア、ウクライナ、イエメン
重度汚染国（100km ² 以上）	アフガニスタン、ボスニア・ヘルツェゴビナ、カンボジア、クロアチア、エチオピア、イラク、トルコ、ウクライナ、イエメン
2020年処理面積	処理面積 146km ² 以上、135,500個以上の対人地雷除去 （参考：2019年156km ² 、122,000個） カンボジアとクロアチアは、2020年、最大の処理面積を報告、それぞれは45km ² 以上を処理し計15,000以上の対人地雷を破壊。COVID-19パンデミックにより、アンゴラ、チャド、エチオピア、セルビア、南スーダン、ジンバブエでの除去作業一時停止。
対人地雷使用者	国家：ミャンマー（未加盟） 2020半ば～2021.10使用 武装集団：アフガニスタン、コロンビア、インド、ミャンマー、ナイジェリア、パキスタン
地雷除去完了	30の加盟国、1の非加盟国、1の地域
除去資金額	2020年約6億4,350万米ドル ▲720万米ドル対2019年
2025年5条義務完了予定	2025年までに期限を迎える国：24カ国、 2025以降期限を迎える国：イラク(2028年)、クロアチア(2026年)、スリランカ(2028年)、パレスチナ(2028年)、 2025以降へ期限延長要求国：セネガル(2026年)、ボスニア・ヘルツェゴビナ(2027年)、南スーダン(2026年)
対人地雷生産国	中国、キューバ、インド、イラン、ミャンマー、北朝鮮、パキスタン、ロシア、シンガポール、韓国、米国、ベトナム。

※ERW(Explosive Remnants of War)：爆発性戦争残存物

(2) 成果の概要

JMASが現在活動する4カ国の医療体制は脆弱で、2020年の新型コロナウイルス感染症パンデミック以降、一部緩和の兆しもありますが、国際航空便の運航停止、厳しい入国制限、移動規制等の処置が継続されています。こうした中でも、現地派遣のスタッフ達は、可能な限り活動を継続し、表の通り着実な成果を上げています。

カンボジアでは、下の写真の様に、地雷処理関連の業務ばかりでなく、安全化した地域での農業支援等地域の復興支援も実施しており、少しずつ実を結びつつあります。

また、ラオスでは写真のごとく、機械も用いてクラスター子弾の処理を実施しており、処理効率が大きく向上しています。

世界有数のダイビングポイントを有する観光立国パラオも、コロナ禍で海外の観光客はめっきり減少しましたが、JMASの業務継続も決まり、スタッフは日々、黙々とERWの処理作業を実施しています。また、パラオと同じく海に囲まれたミクロネシアでは、下の写真のとおり、旧日本海軍の艦艇や民間徴用船が数多く沈没しており、これらの艦艇から油を抜き、ミクロネシアの環境汚染対策、水中文化遺産の保護、観光産業の振興に寄与する活動を継続中です。

2021-2022活動成果総括表

地雷・不発弾処理数	1,199発
クラスター子弾処理数	1,488発
同上安全化面積	833ha (8.33km ²)
処理技術教育	80名
危険回避教育	237回 3,982名
学校建設敷地整備	1ha
道路整備	5Km
側溝整備	5Km
水路新設	1.8Km
暗渠構築	4カ所
戦没船状況調査	7隻
爆雷処理	88発
滞留油回収	8,470 L
潜水等技術移転	12名



カンボジア 地雷原が農地に



ラオス 不発弾探索と機械処理



パラオ、ヘルメットレック爆雷移動作業



ミクロネシア 沈船からの油回収

2 カンボジア王国

(1) 現地の声



道幸孝久代表代行

2022年3月1日現在、代表不在のため東京からリモートで業務をさせていただいております。



中野雅仁専門家③

RSDB1年目、雨季の豪雨やコロナ感染拡大にもめげず地雷処理面積の目標を達成する事が出来ました。



下菌修良専門家②③

21年度SVC事業は例年になく豪雨に見舞われましたが、ほぼ目標を達成することができました。



住友紀充専門家③

在住10年。クメール語が話せる日本人です。直接指導農家と対話しながら農業の基礎を教えます。



横山圭介 総務①

2025年対人地雷全廃という目標に、関係者全員が気持ちを改めて奮い立たせたように思います。



金田浩之専門家③

カンボジアPKOから30年JMAS創設20年の節目にJMASユニホームを着て活動できる運命！私たちへの笑顔も20年の礎があるからこそ。



安藤正喜専門家④

まだまだ私には1年目です。先人の輝かしい功績を汚さぬよう日々邁進して参ります。



米司綾逸専門家④

ジャングルの開墾という初めての体験にドキドキしましたが、スタッフ一同の活躍により、ここまで来れました。

(2) 事業活動

ア バンテアイミアンチエイ州における地雷・不発弾処理を伴う復興支援事業(地図

③) 3個の編成・装備の異なるチームを処理地域の地形・植生等に応じ適所で運用し成果を上げています。また、専門家は現地の学校・コミュニン等で危険回避教育を実施し、地雷・不発弾の事故ゼロを目指しています。



JMASノートを配り危険回避教育



クリスマスプレゼントを渡す専門家



野外集合訓練



地雷処理後に開校した小学校を訪問

イ バンテアイミアンチエイ州における地雷・不発弾処理事業成果 (2021年3月～2022年2月)

処理面積	対人地雷 (うち回収要請)	対戦車地雷 (うち回収要請)	不発弾 (うち回収要請)	住民からの 回収要請	危険回避教育 受講者
249.5ha	334個 (80個)	0個 (0個)	294発 (173発)	46回	1,842名 (66回)



処理前



処理後

ウ ストウントレン州における不発弾機械処理を伴う復興支援事業(地図内④)
2021年～2024年にかけて、ホーチミンルートと呼ばれる旧国道沿いの
クラスター子弹不発弾で汚染された土地を約1400ヘクタール安全化する
ことを目標に活動しています。



伐採除去機

提供: 嶋原麻里奈氏



破碎前

破碎後

クラスター子弹除去機(通称)による破碎処理

提供: 嶋原麻里奈氏



クラスター子弹の爆破処分



安全な農地で安心して作業ができます

エ ストウントレン州におけるクラスター弾・地雷等の処理事業成果
(2021年3月～2022年2月)

処理面積	クラスター子弾 (うち回収要請)	不発弾 (うち回収要請)	対人地雷 (うち回収要請)	対戦車地雷 (うち回収要請)	危険回避教育 受講者
470ha	746個 (35個)	123発 (54発)	1発 (1発)	1発 (1発)	2140名 (171回)



処理前



処理後

オ 安全な村づくり事業(地図内②、③)

2021年度SVC事業は、㊦既存道路の補強整備、㊧溜池整備、㊨水路の新設、
㊩小学校の建替え等を行った。



補強整備を繰り返しやっと村人が待ち望んでいた道路が完成



大洪水に巻き込まれた小学校は場所を変え高い位置に建替中

カ 安全な村づくり事業(地図内②、③)事業成果 (2021年4月～2022年3月)

バタンバン州 及び バンテアイ ミアンチェイ州	既存道整備	既存側溝整備	水路新設	暗渠設置	学校敷地整備
	5 km	5 km	1.8 km	1 力所	1 ha

キ 農地の均平化による農家支援事業(地図内②)

2021年度農地整備支援パイロット事業(農地の均平化)は、州知事以下の全面的な理解と支援・協力及びコマツからの事業運営資金の寄付及び全機材の貸与を受けた万全な体制の下、計画16haに対し約35haの成果を上げることができた。2022年度も小規模農家(1ha以下)の農産物の生産量増収に貢献するため、2021年度を上回る目標達成に努めていく。



ク 農地整備支援事業成果(2021年4月～2022年3月)

	水田均平作業面積	畑地均平作業面積
バタンバン州	25.5ha	本年事業無し
バンテアイミアンチェイ州	9 ha	本年事業無し

ケ 農業支援活動(2021年3月～2022年2月)

(ア) バンテアイミアンチェイ州における水稻農業支援活動

「バンテアイミアンチェイ州における地雷・不発弾処理を伴う復興支援事業」では、開設した試験圃場における水稻実演栽培展示及び農業研修会その他19戸の農家を対象とした巡回指導を行い、当地域における農家の栽培技術向上、農業収益増加を目指しています。



播種機による種まき研修会



肥料研修会



収支計算方法を学ぶ農家夫婦



巡回指導農家家族と専門家

(イ) ストゥントレン州における畑作農業支援活動

「स्टゥントレン州における不発弾機械処理を伴う復興支援事業」においてジャングルを開墾して試験農園を開設するという初めての体験にドキドキしましたが、スタッフ一同の活躍により、ここまで来れました。肥沃な土地とはいえませんが、雨季の排水と乾季の灌水、堆肥の投入で立派な作物が採れると確信しています。



開墾前の試験農園用地



整備された試験農園



農業研修員



農業専門家と農業研修員

コ 2021～2022カンボジア事業トピックス



地雷と闘う女性ディマイナー達！！

JMASは地雷・不発弾処理といった危険極まりない活動ですが、ここでも自衛隊で培った「基本・基礎」の徹底は役立つツールです。左上の女性はRSDBのディマイナーです。カンボジアの女性は遅しく良く働きます。

平日はテントで共同生活をして国・家族のため、強い意志で除去作業をしています。週末は自宅に戻り、家事全般をこなし、母として子育てもして、ついでに旦那の面倒も見ます。

娯楽の少ないカンボジアでは恋愛が生活のメインで中古iPHONE等でSNS、インターネット上で人と人のつながりや交流を楽しんだり、SNS上のビジネス規制がなく、誰でも気軽に起業して頑張ってます。!(^^)!



3 ラオス人民民主共和国

(1) 現地の声



西城真人代表



亀井英紀機械運用専門家



福 栄重事業主任兼会計主任

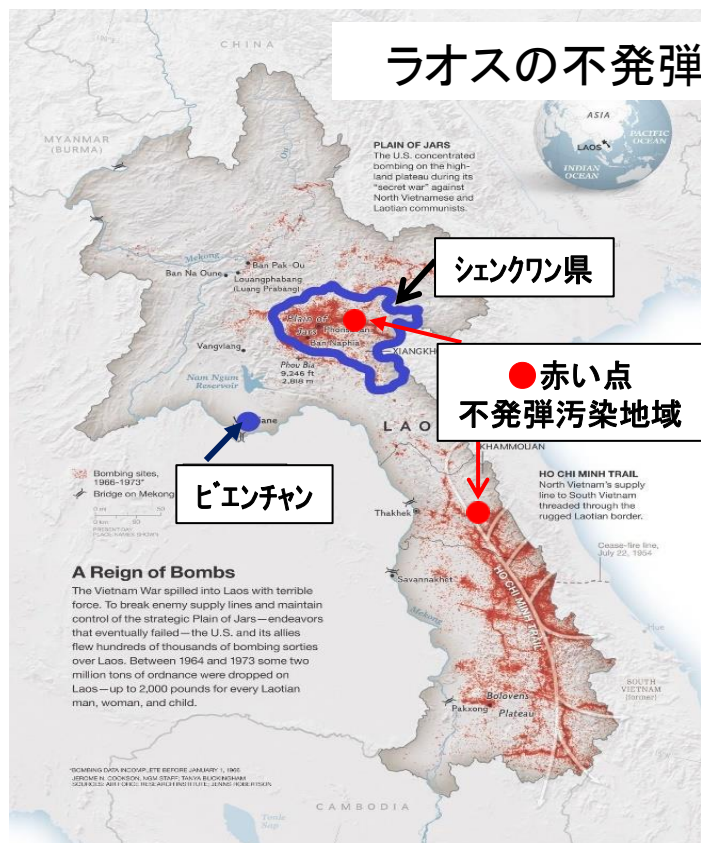
皆様のご支援の下、2年次事業が1件の事故もなく終了する事が出来ました。また5年間に渡る技術移譲の集大成とも言える、UXO Lao隊員による要員養成教育も実施され大きな成果をあげました。

ラオスの時間はゆっくりと流れてます。安全化した土地は今、ゆっくりと実り豊かな緑の大地に変わろうとしています。

コロナ禍により思うようにいかないことが多々ありましたが、制約がある中でいかにして作業を進めるかも専門家の役目。クラスター子弹の汚染地域が緑豊かな農地になり、住民の方々が安心して生活する姿。この仕事をする上で、これ以上の喜びはありません。

今年度は以前から要望のあったUXO Laoシエンクワンとビエンチャンにそれぞれプロジェクトコーディネーターが採用され業務の調整がより一層スムーズに進めて行けるようになり、3年目事業に弾みがつくものと思います。今後とも関係者のご指導ご鞭撻を賜りますよう宜しくお願い致します。

ラオスの不発弾汚染状況と活動地域



- 世界有数の不発弾汚染国
 - ・ 第2次インドシナ戦争で約200万トンの空爆を受ける
 - ・ 約2億7千万発のクラスター子弹の内約8千万発が不発弾
 - ・ 国土の約3分の1にあたる870万haの地域が汚染地域
- 不発弾処理の状況
 - ・ 1996年から2015年までの不発弾による被害者数は3,734名
 - ・ 同期間内に処理したクラスター子弹は785,867発(<1%)
 - ・ 同期間に安全化された面積57,631ha (<1%)

(2) 事業活動

シェンクワン県におけるクラスター子弹機械処理加速化事業

2021-2022事業は、3郡6村で120haの汚染地の安全化、教育の指導員を養成、UXO Lao自ら要員教育を実施することを目標にしてきました。やはり言葉の壁（通訳の能力を含め）が大きいと感じています。2022-2023事業は3郡6村で100haの土地の安全化と機材等の管理全般の能力向上が目標です。



探査の初めは伐採から



探査作業の様子



山中の探査作業の様子



信管の状態を確認



破砕された信管の回収



地表に出ていたクラスター子弹
BLU26



移動中のクラスター子弹除去機
(通称)



処理中のクラスター子弹除去機
(通称)



専門家による教育



機会教育

聞き取り調査



処理バケットの整備



陣中見舞いに来た土地所有者

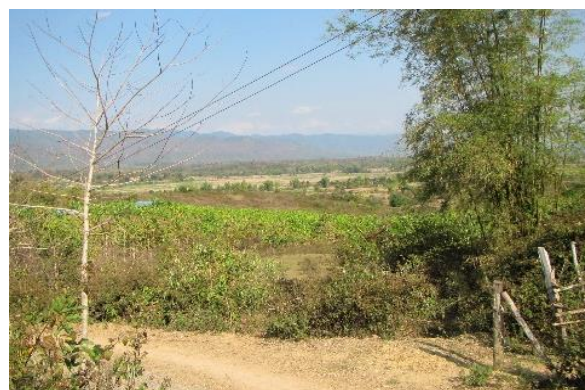
(3) 事業成果

新型コロナ禍により、事業目標の達成に様々な影響を受けた2021-2022年の活動でしたが、少しずつ対応要領が確立されてきたようです。対象期間内の主要な成果は次の通りで、コロナ禍で約1ヶ月処理活動が中止した昨年と比べて、処理面積は、54%程拡大しています。
(2021年4月～2022年3月)

項目	機械処理数	爆破処理数	処理地	処理面積
成果	742発	435発	3郡・6村	113.9ha



処理地はパッションフルーツの果樹園になりました



処理地はバナナ畑になりました

(4) 2021～2022ラオス事業トピックス



JMASは、5年間にわたってUXO Lao隊員にクラスター子弾除去機の操作、整備等について技術移譲(OJTを含む)してきましたが、その集大成ともいえるUXO Lao自ら要員養成教育を実施して、6名の新規要員を養成しました。

4 パラオ共和国

(1) 現地の声

現地代表 島田正登



パラオにおけるJMASのERW(爆発性戦争残存物)処理活動は2012年に開始し、2022年3月をもって終了の予定でしたが、まだ多くのERWが残存する状況にJMASとしても活動の延長を強く希望していたところ、関係方面の協力を得て、3年間の延長が認められました。スタッフ一同気持ちも新たに、残された期間での任務完遂を目指して、頑張りたいと思います。

ERW専門家(主任) 田村博義



2022年3月任期を満了し帰国しました。在任中、マラカル湾内に沈む旧海軍徴用弾薬輸送船(通称ヘルメットレック)の第3船倉内に残存する爆雷約200発を、発掘、揚収し、処分場へ移送、焼却処分を完了できたことは、オヤジEODの「ピクリンイエロー」勲章です。

ERW専門家 牧 正彦



コロナ過、パラオ勤務2度目を迎える事に成りより一層国際貢献に励みます。

ERW専門家 篠山浩司



レンジャー訓練、潜水処理作業において事故も無かった1年、来期はレンジャーの更なる技術向上と安全、健康に留意して頑張りたいと思います。

ERW専門家 橘 利至



パラオにきて3年経過しました。毎日変化する海を相手に地道にひとつひとつ爆雷を処理しています。パラオのきれいな海を子供たちに残せるよう頑張っています。

パラメディック 星野光男



この1年も大きな怪我もなくこれたのは、任務にあたる者の安全意識の高さの賜物であり、気持ちよく任務を遂行できている証拠です。これからも気持ちよく任務が遂行できるように気付いたことは躊躇せず言葉として発していきたいと思っています。

(2) 不発弾(ERW)処理事業

2019年3月から、爆雷500発余りを積んだままマラカル湾内に沈んだ通称「ヘルメットレック」の爆雷処理を実施しており、2022年3月までの3年間で、200発以上を処理しました。

爆雷は、船倉から引き上げ海中で梱包し、海上及び陸上を処分場まで移送した後、焼却処分します。

今後は、「ヘルメットレック」に残る300発ほどの爆雷の処分を継続するとともに、パラオ政府からの要請による不発弾処理も適宜実施していきます。



船倉内の爆雷



船倉から作業場へは、バルーンを使って爆雷を移動します



作業場での爆雷の梱包



陸送のため、港でトラックに移載します



ボートで、最寄りの港まで輸送します



筏のクレーンを利用して爆雷をボートに積みます



処分場でトラックから降して焼却準備をします



焼却中



焼却後の爆雷

(3) 技術移転教育

2019年3月から3年計画で、コロール州レンジャー6名に対し、海中での不発弾探査・処理技術を教育してきました。今期はその最終段階として、ヘルメットレックに残存する実際の爆雷を使用し、水中移動・梱包・移送等一連の手順の反復実習を通じて、基本的な技術の定着を図りました。

今後は、今期までに培った技術の上に、更に、様々な環境下でより安全に不発弾処理作業等を実施できるような応用技術の体得と、レンジャー隊員相互による技術移転のための教育指導要領の習得を狙いとした教育を実施していきます。



船倉内における爆雷処理実習



JMAS専門家及びレンジャー隊員
総員集合



爆雷の水中移送実習



爆雷の梱包実習



筏のクレーンを使用して、
爆雷のボート搭載実習



海底地形完熟訓練

(4) 2021～2022 パラオ事業トピックス

大戦中に米上陸部隊と日本軍守備隊とが激戦を繰り広げた、ペリリュー島のオレンジビーチにおいて、海岸線の不発弾探査を実施しました。



探査要領の事前打ち合わせ



探査開始



ペリリュー島日本人慰霊碑

5 ミクロネシア連邦

(1) 現地の声



現地代表 岩田高明

人生最期の御奉公と考え、ミクロネシアにやって来ました。厳しい入国制限下、赴任に23日掛かりました。かつて、日本人と現地の人々が、ヤシの葉陰で仲良く十字星を眺めていた世界を再現したいものです。



専門家 白木健治

2021年10月に着任しました。
徳島県出身58歳、美しいミクロネシアの海で今日も頑張っています。



専門家 金子則雄

コロナ禍でスタートした2期1年半経過するが状況変化なし。ミクロネシア連邦の入国制限が続き未だに観光客等はゼロ。海は貸し切りで技術移転者の潜水レベルが日々向上しているのが幸いです。



専門家 牧 正彦

パラオに出張中です



(2) チューク州における戦没船油漏れ対策事業

ミクロネシア、チューク州のトラック環礁において、以下の五つの事業を実施しています。Covid-19に係る厳しい入国制限で専門家が入国できず、現地代表と2名の専門家、計3名で頑張っています。

1. 戦没船内の漏油回収
2. 周辺海域の探査・海底状況図の作成
3. 戦没船の継続的なモニタリング
4. 戦没船の写真撮影及び3D画像作成
5. 技術移転

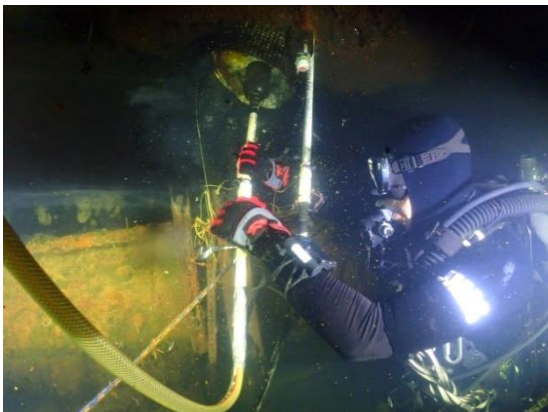
ア 戦没船内の漏油回収



①船上でのポンプ操作



②ボートから戦没船へのホースへの展張



③戦没船内にホースを固定、漏油を吸引



④回収油は州政府の倉庫へ併設

イ 戦没船の継続的なモニタリング



戦没船外周の潜水調査

ウ 技術移転



座学:潜水器材整備法

(3) 2021～2022 ミクロネシア事業トピックス



新州知事表敬



事業調整会議



地元関係者及び
子供達との交流



政府関係者との懇親

6 本部

(1) 全般



第19回通常総会

本部では、6月16日に第19回通常総会を開催、令和3年度の事業計画等が承認されました。新型コロナウイルス感染防止観点から、会員の皆様に努めて書面による表決にご協力いただきました。なお、本総会をもって鈴木理事長が退任、岸川理事長に交代しました。

理事会では、活発な審議を経て議案が処理されました。

(2) 広報

ア 全般

昨年に引き続き、世界的に新型コロナウイルス感染症が猛威を振るう中、広報活動も大きく制限を受けましたが、HPの魅力化、外務省・開発協力広報動画におけるJMASの紹介、グローバルフェスタJAPAN 2021におけるフォトコンテスト入賞、PLANTS MINE企画への協力、徳島新聞での専門家の記事掲載と話題は豊富でした。

イ グローバルフェスタJAPAN 2021(2021.10.9～10.10)参加

● 又吉直樹氏と対談

外務省、独立行政法人国際協力機構(JICA)、特定非営利活動法人国際協力NGOセンター(JANIC)共催によるグローバルフェスタJAPAN 2021に参加しました。これに合わせて公開された、外務省広報動画「フロントランナー～世界の未来を作る日本人たち」では、芥川賞作家・コメディアンとしても活躍する又吉直樹氏と岸川理事長の対談とJMASの活動が紹介され



又吉氏と岸川理事長対談

ました。この動画は、外務省、吉本興業、JMASのHPで公開されています。

また、動画公開のオープニングとして行われた、又吉直樹氏、向井慧氏(パンサー)、吉村崇氏(平成ノブシコブシ)、外務省国際協力局上田肇政策課長とのトークショーに道幸事務局長が出演し、地雷・不発弾問題の現状やJMASの活動について紹介致しました。



平和への思いを語る又吉氏



トークショーに道幸事務局長参加

●外務省フォトコンテスト入賞

グローバルフェスタJAPAN2021外務省
フォトコンテストにおいてJMASが応募した
「未来へとつながる道」が入賞いたしました。
風景のみが被写体の作品としては、
唯一の受賞でした。この写真は、本特集
号の表紙にしております。



ウ 世界の地雷を減らす緑の循環 PLANTS MINE企画協力

(株)ミレデザインズ社が開発・企画、東京新人
ファッションデザイン大賞グランプリ・文部科学
大臣賞等を受賞されている新進気鋭のデザイ
ナー杉本知春氏(28)がデザインを担当、聖新
陶芸株式会社が製造する古紙100%の地雷型
栽培キットが販売開始。収益の一部はJMAS
への寄付となり、地雷・不発弾処理に活かされ
ます。一過性でないSDGsの価値観、時代の変
化の一端を担うため、皆様のご支援・ご協力
をお願い申し上げます。



100%古紙の地雷型プランター

エ 白木専門家(ミクロネシア事業)徳島新聞 (2022年1月9日)で紹介

JMASミクロネシア事業で活動中の白木専
門家が、1月9日の徳島新聞で紹介されまし
た。徳島県海部郡牟岐町出身の白木専門
家は、海上自衛隊で機雷を処理する掃海隊で
勤務していた経験をいかし、ミクロネシアの
旧日本軍の戦没船からの油漏れ対応の事
業で活躍しています。



V 将来ビジョン「JMAS2030」

1 はじめに

設立20周年の結節を捉え、より魅力と活力ある組織への改革が必要との認識の下、現在組織一丸となって、今後の進むべき方向性を明らかにするため、将来ビジョン「JMAS2030」の策定にチャレンジしています。

ここではその概要について紹介させていただきます。引き続き、我々の活動に対するご理解とご支援・ご協力をお願いいたします。



理事長
岸川公彦

2 現状の評価

- (1) 「自衛隊OBを主体とし、厳しい訓練で培った高い技術力を活かして活動する」との基本的な考え方は、今後も普遍であり、引き続き堅持していく。
- (2) 地雷・不発弾処理のパイオニアとして、20年間にわたり真摯に活動してきたことで、国内外から高い評価を獲得する事ができた。特に、
 - ① 支援対象国における安全で豊かな社会の創造に貢献
 - ② 我が国外交の一翼として、支援対象国との関係の強化とインド太平洋地域の安定に寄与
 - ③ 近年、現地のニーズを受けて、その活動範囲を社会インフラ整備等にも拡大していく一方、活動の長期化に伴う、JMAS設立理念の希薄化や社会の関心事項の変化に伴う会勢の減衰等により、会としてのモメンタムが低下してきている。



JMASを取り巻く各種環境の変化等を踏まえ、さらに「魅力と活力のある組織」への改革にチャレンジ!!

3 主要な課題と6つのチャレンジ

- (1) 平和構築の意義・役割の変化
平和構築の意義・役割が、持続可能な平和と開発に向けた基礎を築くための措置を含めた一連のプロセスへと拡大していく社会。

→SDGsを始めとした新たな取り組みにチャレンジ



(2) ERW処理支援に偏重した事業態勢

地雷問題解決の目標年である2025年以降における地雷問題の先行きが不透明な中、JMASとして事業の大半を爆発性戦争残存物処理支援事業に偏重した態勢となっていることは、将来の安定的なJMASの運営にとって潜在的リスクであり、将来にわたってJMASを安定的に運営していくために、

→更なる事業の多角化にチャレンジ



(3) 活動の長期化に伴う設立理念の希薄化

20年にわたる活動を通じ、ノウハウの蓄積、業務の標準化、更には、関係機関との緊密な関係の構築等が図られた一方、設立理念の希薄化、組織・業務の硬直化等が見られるようになった。このようなマンネリの状況を打破するために、

→意識改革及び組織・業務の改革に積極的にチャレンジ



(4) 事業推進に当たりJMAS単独では対応に限界

活動領域が多機能化・高度化さらには財政所要が増大する中、単独組織として対応するには、多くの課題が顕在化しつつあるため、

→国内外の各種関係機関等との連携強化にチャレンジ



世界の未来を創る
フロントランナー

地球から地雷をなくそう

(5) 財政基盤の硬直化

事業財源が一部の組織・企業に偏重した構造となっており、将来の事業多角化のための柔軟性及び強靱性に欠けることから、

→新たな機関・企業との連携拡充を通じた新規財源の確保にチャレンジ



(6) 人的基盤の弱体化

地雷・不発弾処理に関する国内外の関心の低下を受け、会員・支援者・協力者が減少(自己財源の減少)、これに伴い慢性的な人材不足が常態化

→会勢拡大、新たな人材確保につながる広報、事業の展開にチャレンジ



子供にも人気のJMAS
これを支援者拡大に

4 MISSION

「優れた技術力をもって、安全で豊かな国際社会の創造に貢献する。」

5 ビジョン(中期的な方針)

「JMASは、国際組織及びNGOをはじめとする各種機関等と連携しつつ、優れた技術力をもって、地雷処理・不発弾処理事業を中核とした各種平和構築活動を行い、安全で豊かな国際社会の創造に貢献する。」



6 今後の事業展開における重視事項(2022年～2030年)

- 平和構築の推進と現地のニーズに応じた持続可能な「街づくり」、「人づくり」の支援を通じて「安全で豊かな社会の創造」に寄与

安全づくり

地雷・不発弾等の除去と安全教育・啓蒙、除去技術の継承

街づくり

インフラ整備支援

仕事づくり

農業支援等

人づくり

未来を担う子供の教育を重層的かつ段階的に支援して、「質の高い成長」に貢献

- 地球規模の課題、特に環境問題への取り組みの強化
ERW活動等を通じた海洋環境の保護により、現地の観光等経済活動基盤の維持・強化を持続的に支援して、「質の高い成長」に貢献する。

- 各種国際機関・NGO・企業等とのパートナーシップの拡大・強化

上記重視事項を通じ、活動国の「質の高い成長」への貢献を実現するため、ビジョンを共有し、協働できるパートナーを確保し、その拡大・強化を図る。



KOMATSU



7 「JMAS2030」が目指す事業のイメージ(2025年～2030年)

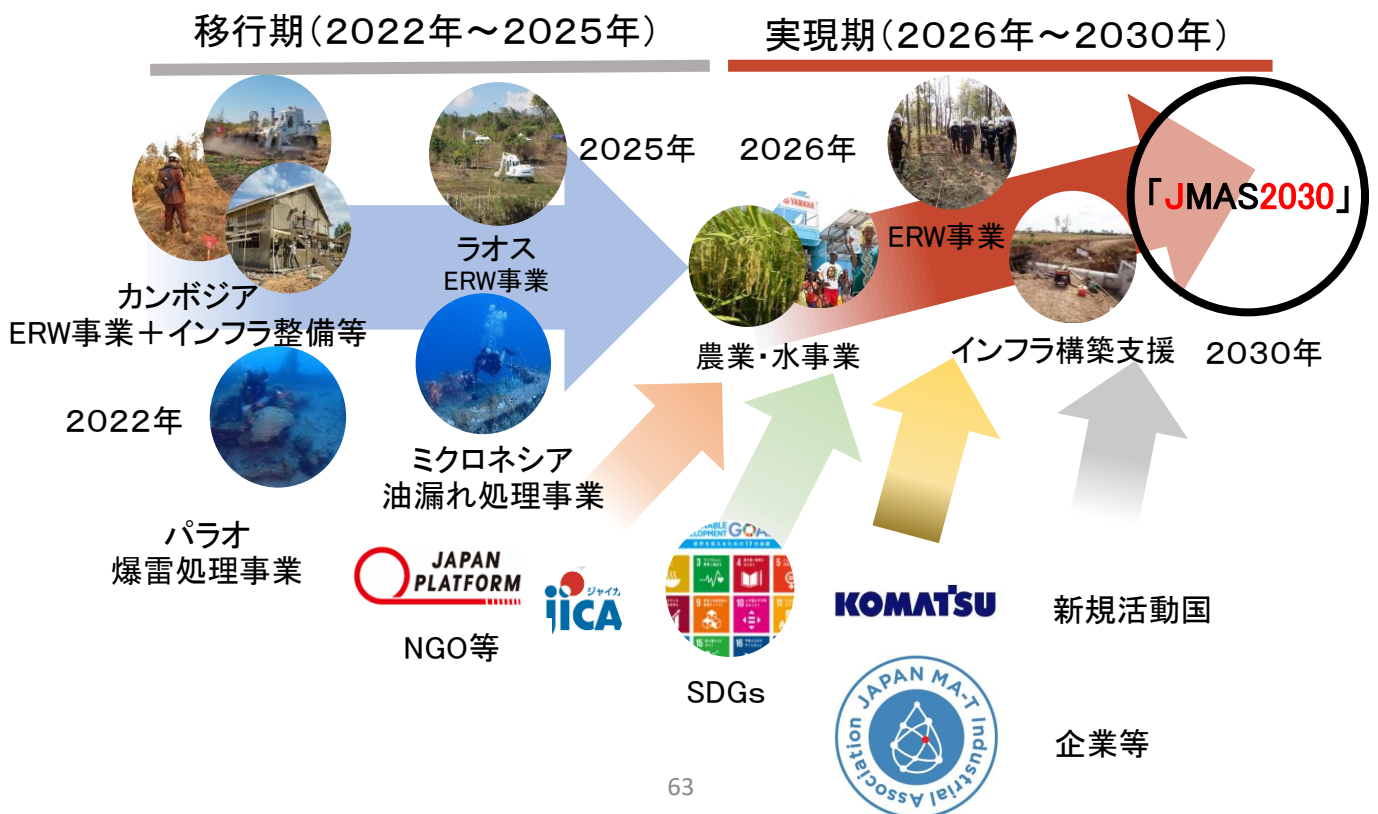
「平和と安全を創造」と同時に、その場で現地のニーズに応じた「街づくり」や「人づくり」支援を行い、活動地域の持続的な「安全で豊かな社会の創造」に貢献



8 「JMAS2030」に向けたロードマップ(Road to「JMAS2030」)

ビジョン、今後の事業展開における重視事項等に基づき、

- ① 2025年を目途に現行事業を行いつつ、**組織・事業の改革を推進**
- ② じ後、「質の高い成長」を実現しうる**新規事業を展開**し「JMAS2030」を実現



VI 資料

1 JMAS早わかり Q&Aとよくある質問

JMAS全般について

Q 会の名称が「日本地雷処理を支援する会」となっていますが、地雷等の除去以外の活動をしていますか？

A 認定特定非営利活動法人である日本地雷処理を支援する会(Japan Mine Action Service - JMAS)は、海外で地雷・不発弾の除去を主体とし活動しておりますが、旧日本海軍関係の沈船の油漏れ対策、道路構築、農地整備支援、農業技術支援等の国際貢献活動を行っています。



不発弾等の処理について

Q 地雷とは？

A 地雷は安価かつ設置容易な兵器で、世界各地の内戦や紛争地域において、大量に使用されており、人を殺傷することを目的とするものから、車両や戦車の破壊を目的とするものまで様々なものがあります。問題は、戦争が終わった後も、半永久的に人々を無差別に殺傷する非人道的兵器で、その除去には、多額の費用と非常に多くの労力がかかります。また、日本でも未だに問題となる事がありますが、戦争中に投下されたが爆発しなかった爆弾やロケット弾といった不発弾も、地雷と同様に危険なものです。



不発弾等の処理について

Q 地雷や不発弾は**どんな所にありますか？**

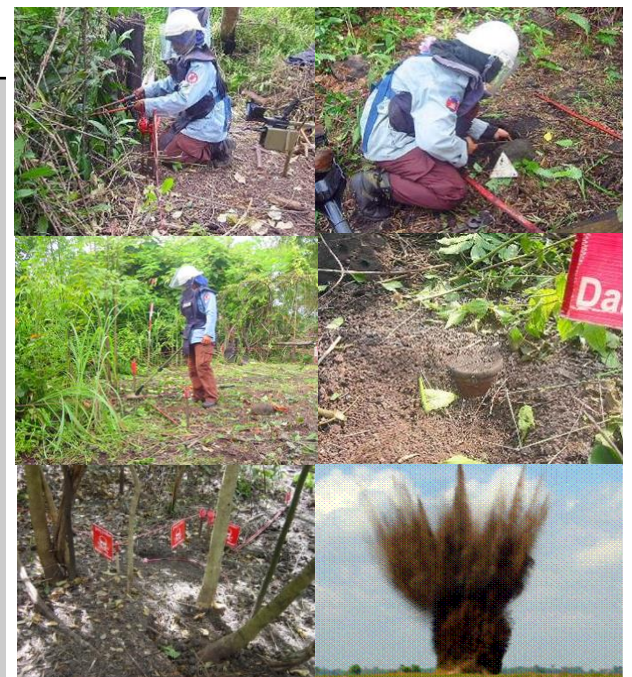
A 「**何処にでも**ある。」と言ってしまうとそれまでですが、航空機から投下され爆発しなかったクラスター弾などは広範囲に分布しています。また、地雷は洪水等で流されたり、状況によっては、家の軒先、道路脇等でも発見されます。



Q 地雷の処理はどの様に行うのですか？

A 通常下記の手順で行います

- 1.マーキング(径始)
- 2.目視点検及びわな線除去
- 3.灌木除去及び雑草除去
- 4.地雷探知器による探知
- 5.地雷の掘り出し
- 6.地雷識別及び除去
- 7.原則としてその場爆破、安全確認が出来たら、回収後まとめて付近で爆破



Q 地雷・不発弾等の処理の専門家とは？

A 発見された、地雷・不発弾等を「識別」、「安全化」する作業には高度の専門知識と技能、経験が必要です。発見される状態も千差万別なので、**兵器に関する知識のみならず、戦術的知識・判断**も求められます。

JMASの隊員は、**自衛隊在職中に専門教育を受け、厳しい訓練と豊富な経験を積んだ者が**参加しています。更に、**様々な国の兵器にも精通**しています。こうした、人を「JMASでは、**専門家**」と称しています。



不発弾等の処理について

Q 対人地雷除去機の操縦は現地の人ですか、機械の維持整備はどのようにしていますか？また、操縦に必要な資格はありますか？

A 当会の活動の目標は、**現地の人達が自らの手で地雷原を処理出来るように支援すること**です。従いまして、対人地雷除去機は**現地の人**が操縦しています。その他、補給・整備維持管理を含めて技術指導しています。対人地雷除去機の操縦は、大型特殊自動車免許を有し、ブルドーザーの操縦経験があれば、操縦可能です。更に現地が地雷原のため、**地雷・不発弾処理に関する知識が必要**となります。



入会・寄付・送金について

Q 入会したいが入会条件がありますか？手続きはどの様になっていますか？ 会費はおいくらですか？会費以外に、寄付は必要ですか？

A **入会については、特に条件に定めはありません**。正会員費を納めた方は正会員となります。**正会員(個人会員)**の会費は**年会費1万円**とさせて頂いており、毎年1万円お支払い頂く以外は、その他の会費、寄附等の必要はありません。細部は本誌の「Ⅶ ご支援のお願い」のページまたはJMASホームページ右上隅に掲載している「ご入金・ご寄付・ご支援について」をご覧ください。

Q 正会員と賛助会員の違いはなんですか？

A 正会員とは、総会において議決権を有する会員です。賛助会員とは、総会において議決権を有しない会員です。賛助会員の会費は1000円(1口)／年以上とさせて頂いています。細部は、ホームページの「JMASとは」の「定款」及び上記と同じく「ご入金・ご寄付・ご支援について」をご覧ください。

Q 会員になった場合、どのような活動に参加するのですか？

A **会員としては総会における議決への参加**(委任を含む)以外に特に活動に参加する義務はありませんが、当会の活動に対するご提言、ホームページ作成、イベント支援等ご協力いただける場合は事務局までご連絡ください。

Q カード決済、ワンクリック寄付が出来ませんか？

A gooddoのバナーからワンクリック寄付が可能です。Give One、Just Giving Japan等のサイトからは、御寄付御入金頂けます。ホームページの活動を支援するからアクセス出来ます。→次ページに続く(「gooddo」について)

(前ページから続き)

「gooddo」は、応援したい社会貢献団体を、誰でも、今すぐ、簡単に支援をすることができるソーシャルグッドプラットフォームで、社会貢献を身近な存在にすることをミッションとしています。(内閣府 NPO ホームページ: 活動事例集)

JMASホームページの「ご寄付のご案内」→「クリック募金」→「gooddoのバナーから入室されるか、<http://gooddo.jp/gd/group/jmasngo/>のURLから入室下さい。

Q 年に数回又は毎月寄付した場合の領収書を1年分一括して1枚の領収書に纏めての発行は可能ですか？

A 領収証の発行は、年に数回御寄付頂く方々にも、御入金の際に領収証を発行させて頂いております。確定申告等の際に複数の領収証が必要となり、お手数をお掛け致しますが、御入金の都度の領収書発行を御了承下さい。

Q 現地で地雷処理作業に従事したいが、募集はありますか？

A 不発弾等の処理という危険を伴うJMASの現地業務の特性から、現在の日本では、**自衛隊で所定の教育を受け、実務訓練を積んだ方以外の採用は非常に困難**になっているのが現状です。運転免許証のように公的な免許証もありません。

Q 文房具の寄贈は受付けていますか？子供用の古着は寄贈できますか？寄贈するための規約は有りますか？

A 皆様から文房具及び古着の御寄贈を承っております。使用可能な文房具等がありましたら、事前に事務局へ御連絡されてからお送り下さい。ただし、御寄贈が1箱(ミカン10k箱程の大きさ)以上になる場合は日本から現地への輸送費の御負担もお願いすることがあります。その場合は、事前に御相談させて頂くようお願い申し上げます。

Q 井戸を1基寄贈したいのですが、いくら寄附したらいいのですか？

A 井戸1基につき25万円を頂いて、建設しております。

地雷・不発弾の模型及び現場の写真パネルの借用について

Q 地雷の模型、パネル等の借用は可能ですか？

A 地雷・不発弾の模型及び地雷・不発弾処理に関するパネルや、危険回避教育活動、被害の状況、現地の状況等のパネルがあります。当会のイベント等と重ならなければお貸しすることができます。借用の日程や必要数等、御要望を御連絡下さい。送料については御負担をお願い致します。

JMASの採用・ボランティアについて(詳しくは事務局にTEL下さい)

Q 現場での地雷・不発弾処理を指導する技術専門家以外の一般職の募集はありますか？

A **総務や経理業務等を行う職員の仕事もあります**が、現地語学能力又は英会話能力が求められます。現地の総務・経理職員は、多様なことを一人で処理し、様々な出来事に対応していかなければなりません。他社と違い、人を指導して育てる余裕が無いため、即戦力になる人材が求められます。NGOであり、雇用条件も一般の会社に比し劣りますが、海外の国際貢献関係の大学や大学院を卒業されてから勤める方もいます。**東京のJMAS事務所にも経理職の職員採用もあります。どの職員も空席が生じる場合のみ募集**を行うことを御承知置き下さい。

Q 現地でボランティアとして地雷処理活動をしたいが可能ですか？

A 命に関わる危険な作業のため、現地の地雷原において**ボランティアとしての地雷除去を体験することは認めておりません**。

Q 東京の事務所でボランティアとして手伝うことは可能ですか？

A **東京事務所でのボランティア活動は、有難くお受けさせていただきます**。御連絡頂ければ調整させていただきます。

訪問学習・現場研修・講演について

Q 学生や一般人の訪問学習は受付けていますか？手続き、費用等について教えてください。

A **東京事務局において訪問学習等の研修を受付けております**。申込要領は当会ホームページのサブメニューの「見学・学習・講演について」にお知らせしております。費用は無料です。

Q 現地における地雷処理現場を研修したいのですが、どの様な手続きをすればいいですか？

A 手続きについては、JMASのホームページに記載されています。ただ、現地での車及びホテルなどは、御自身でお手配下さい。

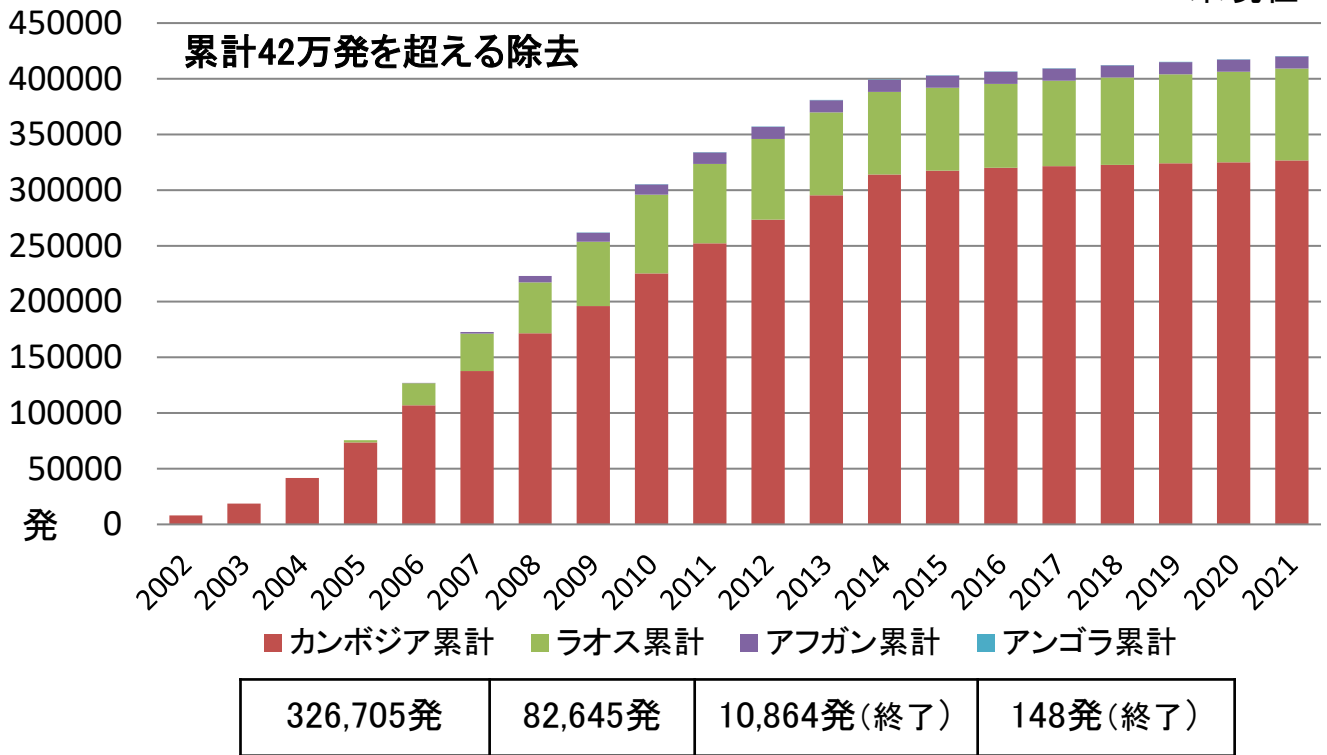
Q 出張講演はお願いできますか？

A 講演については、講演会場までの往復交通費の御負担をお願い致します。

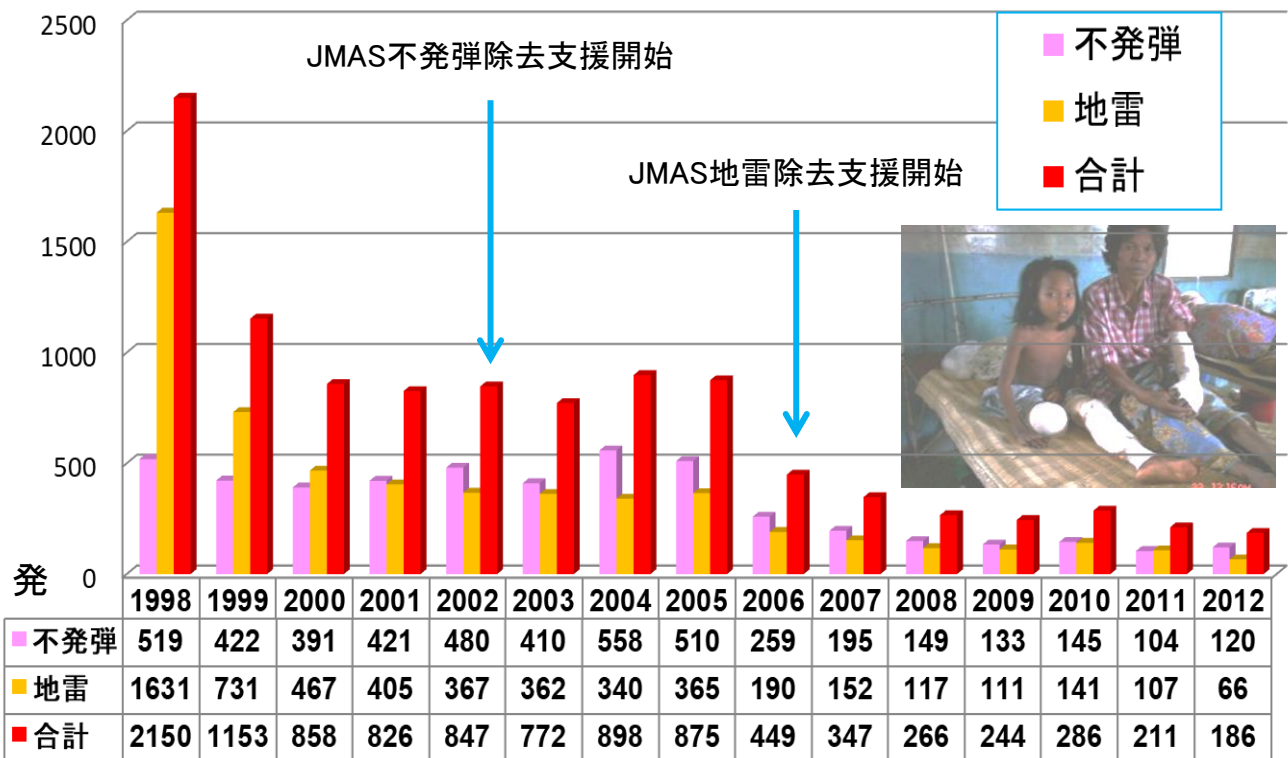
2 活動に関する統計

地雷・不発弾累計除去数

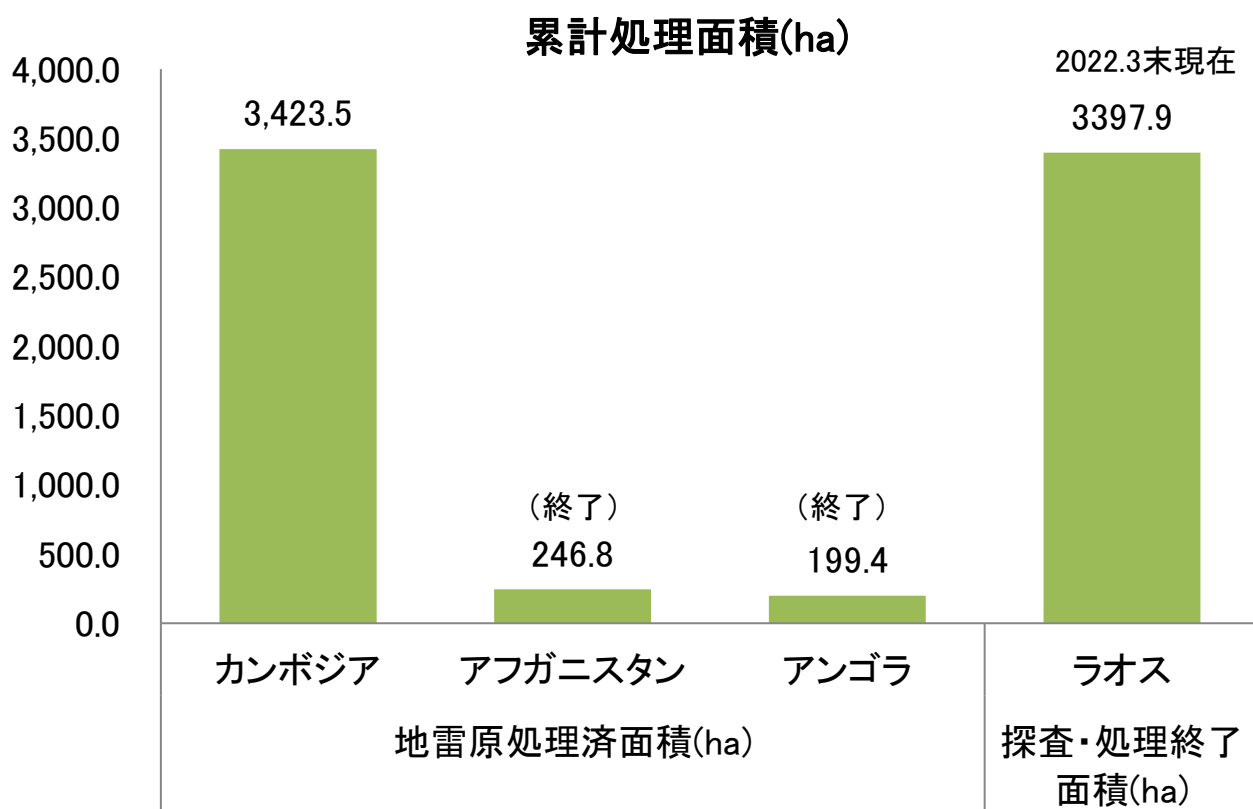
2022.3.末現在



カンボジア王国における地雷・不発弾による被害者数



出典: CMVIS and Casualty Report (CMAA)



地域復興支援事業(カンボジア)

年	道路整備 km	側溝整備 km	暗渠構築 箇所	小学校 箇所	溜池整備 箇所	井戸建設 箇所
2008	4	4	5	1	10	1
2009	3.6	7.2	10	1	10	4
2010	3.5	7	1	1	5	3
2011	4.2	8.4	4	1	3	3
2012	4.5	6	9	0	5	0
2013	3.1	5.9	16	1	1	2
2014	9.5	19	14	1	2	2
2015	6.5	6	3	1	2	0
2016	9.5	8	8	0	0	1
2017	11.5	4	3	1	1	0
2018	6.7	5.6	2	0	0	0
2019	7.9	2.8	4	1	0	0
2020	13	26	3	0	0	0
2021	5	5	1	0	0	0
計	92.5	114.9	83	9	39	16

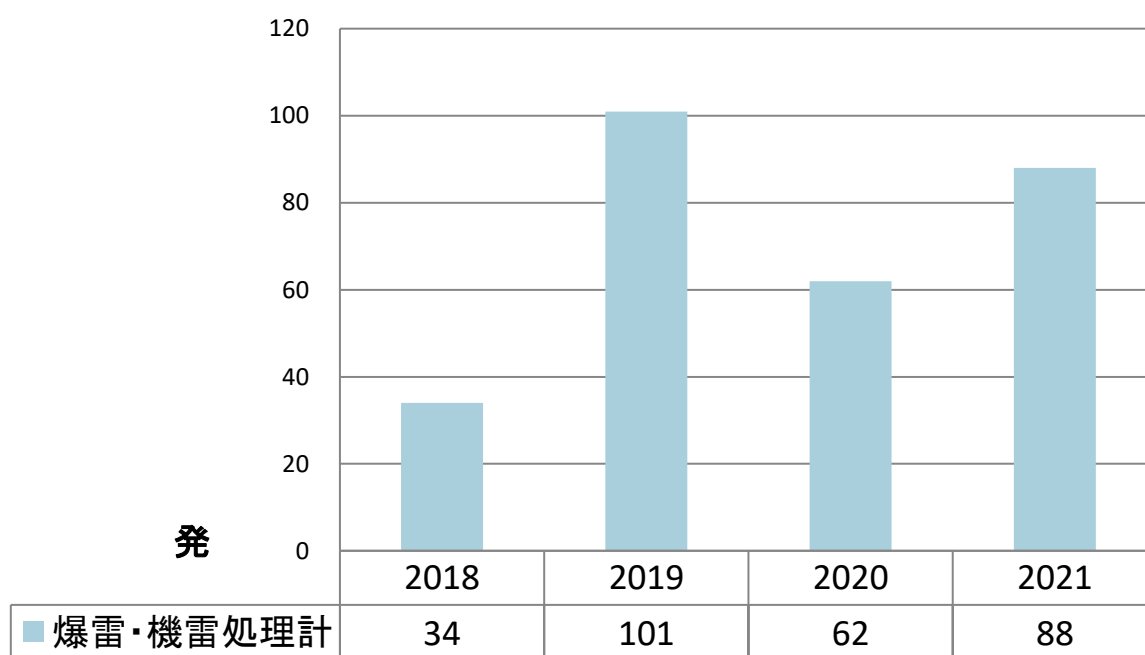
この他2019年ラオスシェンクワン県において小学校1校を建替え

アフガニスタンの事業成果

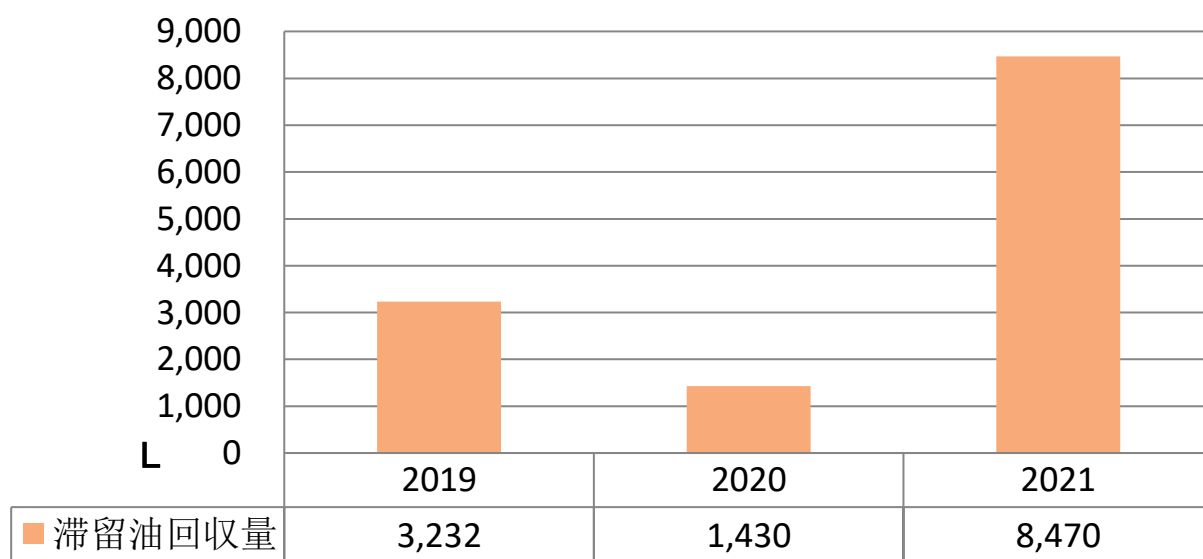
地雷原処理面積	対人地雷処理数	対戦車地雷処理数	不発弾処理数
247ha(東京ドーム53個分)	7,614 発	10 発	3,240 発

(2006.11～2013.3)

爆雷・機雷処理計(パラオ)



ミクロネシア 滞留油回収量



3 不発弾・地雷カタログ

対人地雷・対戦車地雷

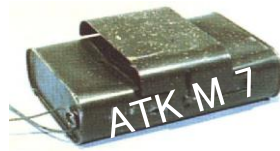
中国製



ベトナム製



米国製



Blast mine
MN79



Bounding M-2 A3
and M- A4



Fragmentation mine
NOMZ 2B

(旧)ソ連製



JMAS活動地域の不発弾

米国製



BLU-61



中国製



82 mm RR HEAT Type 65

ベトナム製



82mm HE Fragmentation



81mm Propaganda



(旧)ソ連製



82mm RR HEAT BK - 881

4 デマイナー(処理隊員)の素顔

装具に身を固め作業現場に向かうデマイナー



ぬかるみから慎重に地雷を探し出す



緊張で玉のように噴き出す汗!!



休憩時は普通の乙女に戻ります



5 現地B級グルメ

アンゴラ フンジ



アンゴラの国民食といえるのが「フンジ」と呼ばれる“大和のり(糊)”のような料理です。キャッサバやトウモロコシを粉に挽いたものにお湯をいれ、餅(もち)のようになるまでヘラを使って力強くこねます。みんなの大好物であり、また腹持ちがよいので、とてもよく食べられています。

左キャッサバの粉、右フンジ調理中 右がフンジ

アフガニスタン マイチャ、プラウ

マイチャは羊肉を塩味でボイルしたもので、プラウは干しブドウや野菜の入った炊き込みご飯です。どちらも薄味で日本人にはとても馴染み易い味です。



マイチャ



プラウ

カンボジア プローク



コンポンチュナン州の名物料理「プローク」は、トレイポールという魚を干してブツ切りにし、塩、砂糖、ご飯と一緒に容器に入れて3週間程漬けたものです。食べる時には、これに玉ねぎ、調味料を加えて鍋で煮ます。味も見た目も鮭に似ていてご飯が進み、お酒のつまみにも合います。一度、お茶漬けにして食べたいなと思っています。

ラオス ラープともち米



東南アジア唯一の内陸国、ラオスの料理にはハーブなど山と川の幸をふんだんに使った素朴でヘルシーな料理が数多くあります。ラオスでは、もち米(カオニャオ)を主食としている特長があり、ティップ・カオと呼ばれる蓋つきの丸い籠に入れて出され、おかずと一緒に、手で食べます。ラープ(ひき肉の香草炒め)はラオスの代表的料理で微塵切りにした肉にレモングラス、ミントなどの香草を混ぜて炒めた料理で、ラープに使う肉は鶏、牛、豚、アヒル、魚など様々です。**超激辛ですのでご注意ください!**

パラオ フルーツバットのスープ

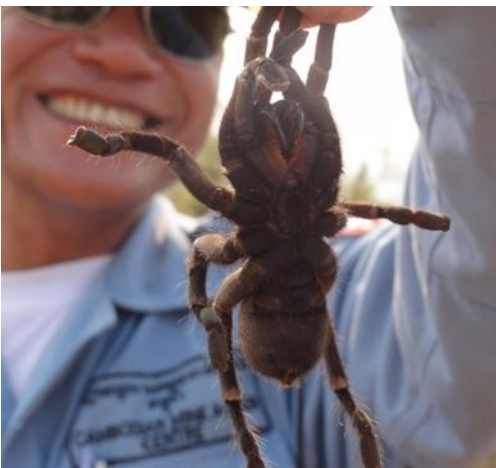
漢字表記は「果物蝙蝠肉汁」?

パラオの郷土料理「フルーツバットのスープ」をご紹介します。フルーツバットは、果物を主食とする蝙蝠(こうもり)です。**見た目は??(ウギャ~!と思わず声のでそうな)姿煮**で登場です。お味は、鶏肉のよう……ともいいますが、「百聞は一味にしかず」。現地へおいでの際は、是非チャレンジしてみてください。



カンボジア 番外編 蜘蛛入り蜂蜜酒

いろいろな物をお酒に漬けて飲むことが好きなカンボジア人スタッフが作った自家製蜘蛛入り蜂蜜酒を紹介します。覚悟(?)さえできれば、味は意外と甘く飲みやすいです。



見た目は、気持ち悪く、口に入れるのはとんでもないと思いました。しかし、思い切って飲んでみると、味は、蜂蜜が入っているせいか、甘く飲みやすいのですが、胃に入った途端、**胃の中がカッと熱**くなりました。「これは何に効くの?」と尋ねると、「奥さんが喜びます。」と現地のバーちゃんが応えます。

6 会勢概況(令和4年3月31日現在)

会 員	個人正会員196名	法人正会員39社	賛助会員12名
寄附件数	86件		

特別協力企業・団体

連番	企業・団体名	連番	企業・団体名
1	株式会社 IHIエアロスペース	28	仙台駐屯地修親会
2	IOS 株式会社	29	ダイキン工業 株式会社
3	青森駐屯地修親会	30	大和探査技術 株式会社
4	アクアリスト	31	多賀城駐屯地修親会
5	明野駐屯地修親会	32	株式会社 ダスキン龍ヶ崎
6	アサガミ 株式会社	33	中国化薬 株式会社
7	旭精機工業 株式会社	34	中部方面曹友会
8	有限会社 アップワールド	35	土浦駐屯地修親会
9	出雲駐屯地修親会	36	デジタルリサーチ 株式会社
10	伊丹駐屯地修親会	37	豊田通商 株式会社 自動車本部
11	岩手駐屯地修親会・曹友会	38	ニッセイ保険エージェンシー 株式会社
12	(株)インフォメーション・ディベロプメント	39	日本電気 株式会社
13	小原台クラブ	40	パブリックリソース財団
14	海田市駐屯地修親会・曹友会	41	深田サルベージ建設 株式会社 東京支社
15	春日井駐屯地修親会	42	藤倉航装 株式會社
16	幹部候補生学校修親会	43	富士修親会
17	北千歳駐屯地修親会	44	富士通株式会社
18	株式会社 クレスコ one%club	45	公益財団法人 防衛基盤整備協会
19	小牧基地OBOGテントの集い	46	一般財団法人 防衛弘済会
20	コマツ	47	北海道日油株式会社
21	株式会社 相模工業	48	幌別駐屯地修親会・曹友会
22	三木会	49	マイクロン・コー 株式会社
23	島松駐屯地修親会	50	松戸駐屯地修親会
24	尚友会	51	NPO法人 松戸あんしんサポートネット
25	神町駐屯地修親会	52	むとう屋
26	新陽 株式会社	53	レディス枚方21
27	仙台駐屯地業務隊OB会		
◆ 継続的に協力・支援を頂いている企業・団体を紹介しています			

寄附型自動販売機協力企業

連番	企業・団体名	連番	企業・団体名
1	アサガミ 株式会社	4	株式会社 通信設備エンジニアリング
2	アサガミプレス株式会社	5	昭和金属工業 株式会社
3	アサガミプレスいばらき株式会社	6	株式会社マイプリント

VII ご支援のお願い

JMASの活動は、皆様からのご支援に支えられています。
ご支援、御協力宜しくお願い致します。

正会員	賛助会員	ご寄付
個人:1万円/年	1口千円以上/年	JMASへのご寄付は税法上の「寄付金控除」の対象です
法人:1口(5万円以上)	「寄付金控除の対象」です	

お振り込み方法

郵便振込の場合

口座名: 特定非営利活動法人
日本地雷処理を支援する会

口座番号:00170-1-13709

* 郵便振込用紙(赤色)を利用し、ゆうちょ通帳・カード扱いで振り込んで頂くと手数料はかかりません。

銀行振込の場合

銀行名:三菱UFJ銀行

支店名:市ヶ谷支店(店番014)

口座名:特定非営利活動法人

日本地雷処理を支援する会

(仮名標記「トクテイヒエイリカツドウホウジンニホンジライシヨリヲシエンズルカイ」)

口座番号(普):1320125

他にもこんなご支援の方法があります

☺書き損じ葉書をお送り下さい

書き損じ葉書郵送用として、返信用封筒をお送り致します。

☺オンラインサイトからの寄付



ギブワン「Give One」のサイトから簡単にご寄附が出来ます。

サイドアドレス:<https://giveone.net/index.html>

団体名検索JMAS

☺寄附型自動販売機の設置ご協力のお願い



JAMS寄附型自動販売機の売上げの一部は、当会への寄付となり、世界の地雷処理をする為に活用致します。

○設置、置き換え無料 ○手間や費用はかかりません

○全国何処でも設置可能

寄附型自動販売機設置に関するお問い合わせは、

特定非営利活動法人寄附型自動販売機普及協会

フリーダイヤル:0120-937-650

サイドアドレス:<http://kjf.or.jp/>



笑顔がすき
人間がすき
平和がすき

認定特定非営利活動法人

JMAS 日本地雷処理を支援する会

Japan Mine Action Service

〒102-0074
東京都千代田区九段南3-8-10
川内ビル10階
TEL : 03-6261-7851
FAX : 03-6261-7852
Email : jmas-hq@jmas-ngo.jp
URL : <https://www.jmas-ngo.jp>

アクセス
市ヶ谷駅から徒歩5分
(総武線各駅停車、有楽町線、南北線、都営新宿線)

